第１章　基本的な事項

第１節　計画の作成

１　作成年月日

令和３年３月31日

２　作成者

岩手県遠野市

３　計画作成の体制

この計画を作成するにあたり、重要文化財千葉家住宅保存活用委員会及び重文千葉家の活用を考える会より意見を聴取し、所有者である遠野市が取りまとめた。

○　重要文化財千葉家住宅保存活用委員会　委員（敬称略）

氏名	所属等	専門	備考
河東 義之	国立小山工業高等専門学校名誉教授	建築史	委員長
月舘 敏栄	元八戸工業大学大学院建築工学専攻教授	景観・建築史	副委員長
大野 敏	横浜国立大学大学院都市イノベーション研究院教授	保存修復	
佐々木 博満	前遠野市文化財保護審議会会長	建築設計	
高橋 恒夫	東北工業大学名誉教授	建築史	令和２年３月31日まで
長谷見 雄二	早稲田大学理工学術院創造理工学部教授	建築防災	
藤田 香織	東京大学大学院工学系研究科建築学専攻教授	木質構造	
二木 幹夫	一般財団法人ベターリビング総括役	基礎構造	

○　アドバイザー

文化庁文化資源活用課、岩手県教育委員会事務局生涯学習文化財課

○　関係団体

重文千葉家の活用を考える会（及川傳弘 会長）

○　事務局

遠野市教育委員会市民センター文化課

４　計画期間

令和３年度から令和12年度までの10年間とし、保存修理事業完了にあわせて改定する。

第２節　文化財の名称・所在地等

１　重要文化財の名称

(1) 名称及び員数

千葉家住宅（岩手県遠野市綾織町）　５棟

(2) 指定年月日

平成19（2007）年12月４日

2　重要文化財の構造及び形式

主屋

主屋 桁行 25.9m、梁間 11.7m、寄棟造、茅葺、南面玄関附属

馬屋 桁行 14.7m、梁間 10.5m、正面入母屋造、茅葺、東面及び西面庇付

土蔵

土蔵造、桁行 17.1m、梁間 5.8m、二階建、一部三階建、切妻造、桟瓦葺、東面庇付

石蔵

石造、桁行 4.9m、梁間 3.9m、切妻造、桟瓦葺、東面庇付、鉄板葺

稲荷社

桁行 3.8m、梁間 3.7m、入母屋造、正面一間向拝付、鉄板葺

附・棟札　3 枚

文政 11 年 12 月 24 日、天保 13 年 7 月 14 日、嘉永 2 年 9 月 19 日

附・鳥居　1 基

石造明神鳥居

大工小屋

桁行 11.5m、梁間 5.7m、寄棟造、茅葺

附・ハセ小屋　1 棟

桁行 15.3m、梁間 5.7m、寄棟造、茅葺

宅地

5593.63 ㎡[1]　上綾織 1 地割 13 番地 1、14 番地、16 番地、17 番地、35 番地

納屋及び石垣を含む

3　重要文化財の所在地

岩手県遠野市綾織町上綾織一地割 14 番地

第 3 節　文化財の所有者・管理団体等

1　所有者の氏名及び住所

(1) 所有者

岩手県遠野市

(2) 所有者の住所

岩手県遠野市中央通り 9 番 1 号

2　保護の体制

遠野市が中心となって保護にあたり、所有者としての市長部局と文化財担当としての教育委員会部局を兼ねる市民センター文化課が保護の担当となる。なお、保存修理工事を中心とした整備工事中は、施工業者が現場の管理にあたる。

1　公簿上の面積、35 番地はハセ小屋の敷地にあたる部分が指定範囲となる

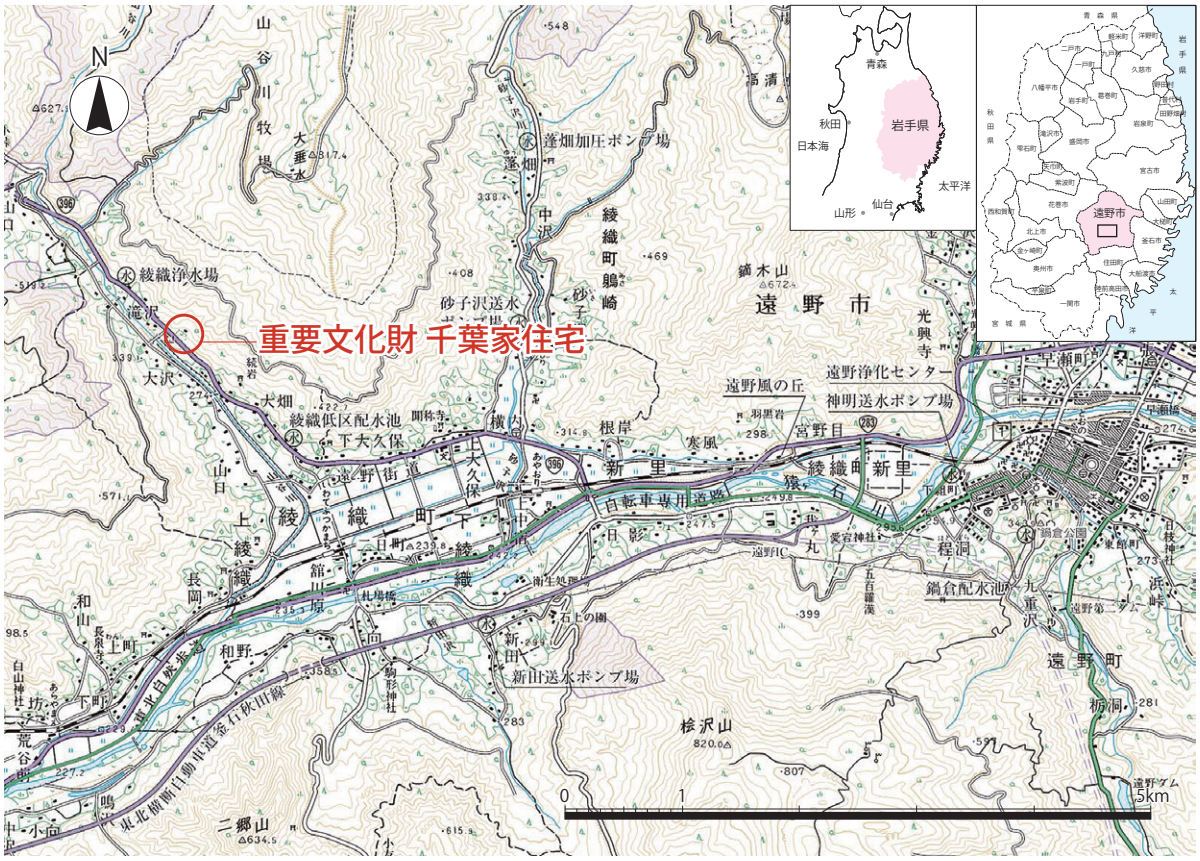


図 1-1　重要文化財千葉家住宅の位置

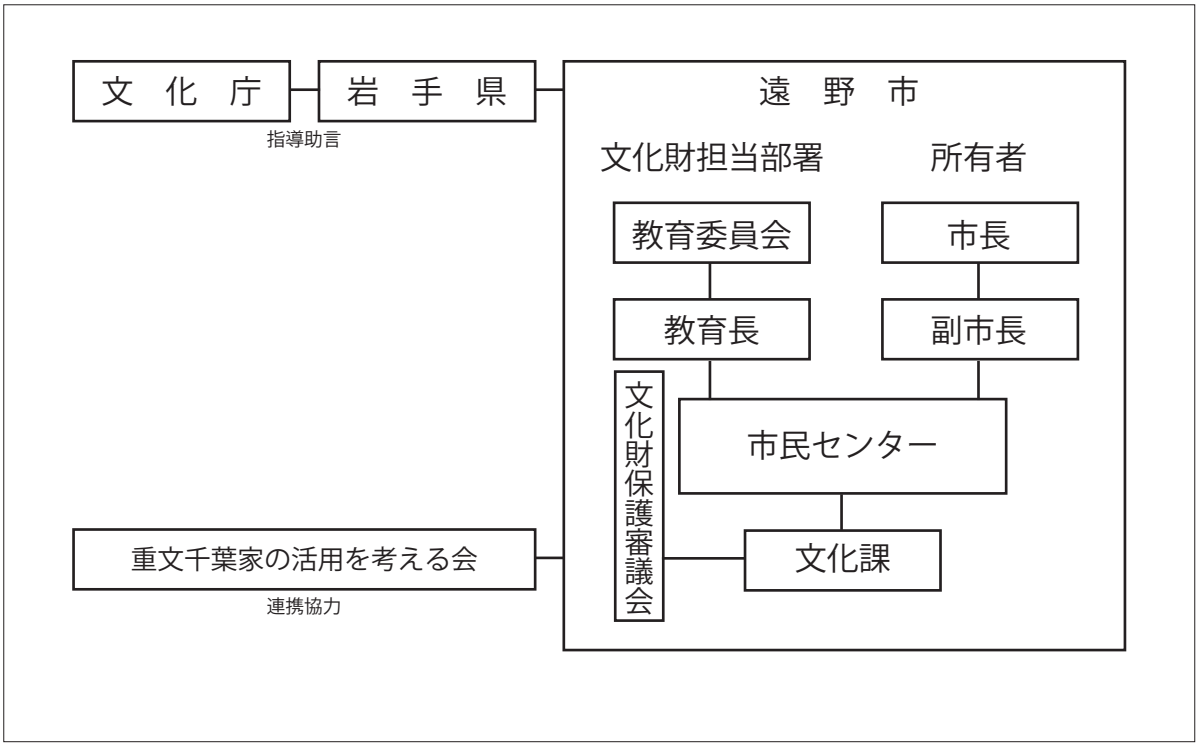


図 1-2　保護の体制

第 4 節　文化財の概要・価値等

1　文化財の構成

(1) 文化財を構成する物件

主屋　1 棟
土蔵　1 棟
石蔵　1 棟
稲荷社　1 棟
　附・鳥居　1 基
大工小屋　1 棟
附・ハセ小屋　1 棟
宅地　5593.63 ㎡
　納屋　1 棟
　石垣（主屋正面、稲荷社、大工小屋）総延長 191.7m

(2) 一体となって価値を形成している物件

① 附属屋

外便所　1 棟

② 工作物

石垣（納屋東面、土蔵西面、土蔵及び便所南面、主屋背面）総延長 108.2m
木製鳥居　1 基
カド（水場）　2 カ所
柵（正面石垣上・稲荷社石垣上）　2 カ所
石碑　5 基[2]
幟立て　2 基

③ 敷地

裏山　228129 ㎡

2　文化財の概要

(1) 立地環境

千葉家住宅は岩手県遠野市の西側、綾織町上綾織の山谷川流域の上流部にある、標高約 330m の緩勾配斜面地上を造成して築いた石垣上に立地しており、綾織町の集落を広く一望することができる。古くより盛岡との主要な交通路であった、遠野街道[3]沿いにあたる。遠野市はその大部分が遠野花崗岩体と呼ばれる岩盤の上に位置し、これに発達する直線的な節理に沿って風化や浸食が進み、十字型の遠野盆地が形成されている。千葉家住宅の立地する山谷川流域は遠野盆地の西端にあたり、緩勾配斜面地は花崗岩体が風化浸食されて、崩壊した花崗岩の巨石が谷を埋めて形成されている。そのため、千葉家住宅周囲には花崗岩の巨石が数多く露出している。

(2) 敷地

2　指定区域外の 3 基は含まない
3　現在の国道 396 号

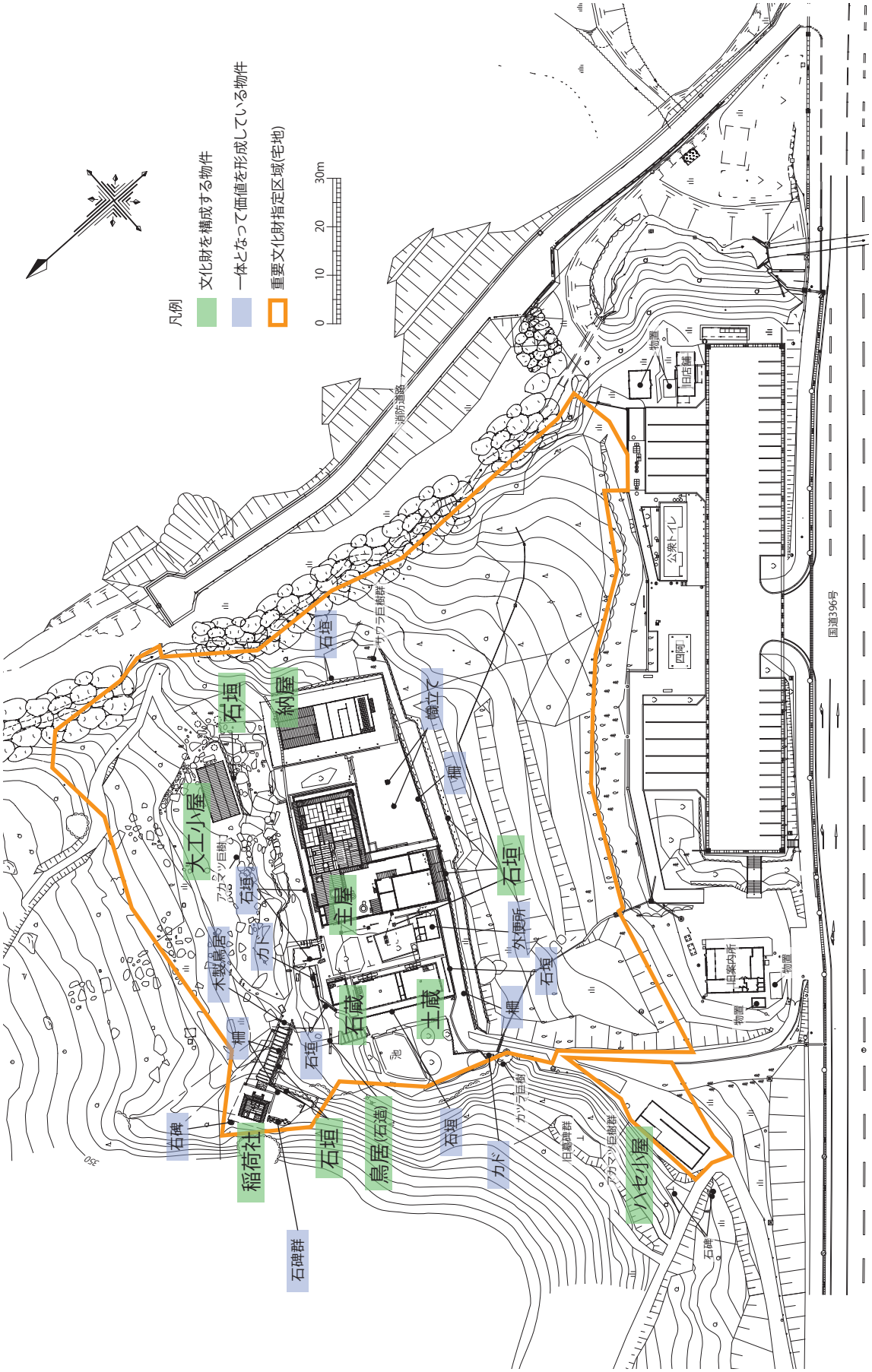

凡例
文化財を構成する物件
一体となって価値を形成している物件
重要文化財指定区域(宅地)
0
10
20
30m
消防道路
公衆トイレ
旧店舗
物置
国道396号
大工小屋
納屋
石垣
主屋
土蔵
石蔵
鳥居(石造)
稲荷社
石碑
石碑群
ハセリ小屋
外便所
旧案内所
池
柵
カド
木製鳥居
アカマツ巨樹
サクラ巨樹群
旧墓碑群

図 1-3　配置図

山麓の南斜面を造成し盛土して平場とし、前面に長大な石垣を築いて、中央に主屋を南面して構えている。主屋を中心として、西に土蔵、石蔵、東に納屋、後背地の斜面上に大工小屋、稲荷社を配置し、南側の街道に向かう道路脇にハセ小屋があり、その上方に墓地を配する。石垣の下と、後背地の斜面はかつて畑地であった。敷地の東側は沢によって区切られ、西側には潜在的な水脈がある。裏山には、広葉樹と植林された杉が混在し、無数の花崗岩の巨石が埋める沢がある。

東側の沢の東岸には国道から進入する消防道路を整備している。また石垣の下の斜面の下端を造成して駐車場が整備されている。なお、駐車場の大部分は岩手県の所有地となっている。

(3) 歴史

千葉家住宅は、江戸時代から栄えた豪農の農家住宅である。

口伝によると、千葉家の先祖は源頼朝の御家人千葉氏の従士で、戦国期には戦国大名の葛西氏[4]に仕え、主家が滅んだ後、遠野に逃れてきたという。史料によると、江戸中期には農業を営み、駄賃付けや金貸しなどで財を成し、村方三役のうちの「組頭」にも就いており、江戸末期には武士の身分を得た。はじめ千葉家は「長洞」を号し、その後「山谷川」を名乗り、士分に列せられてから「千葉」姓を用いるようになった。しかし、地域では「山喜[5]」と呼ばれている。天保の飢饉の際に、当時の当主である四代喜右衛門が、困窮していた人々の救済のため屋敷地の造成や主屋の建築を行ったと伝わる。あわせて、この頃に、現存する大工小屋、ハセ小屋が、その後元治元年（1864）に稲荷社が建築された[6]。明治期には更に事業を拡大し、村長を歴任するなど公職にも就いていた。この頃に現存する土蔵の建て替え、石蔵の建築を行っている。昭和 49 年からは「南部曲り家千葉家」として公開し、遠野観光の先駆けとして中心的な役割を担ってきた。平成 19 年に重要文化財の指定を受け、平成 25 年に遠野市が公有化し、平成 28 年度から保存修理工事を行っている。

(4) 性格

千葉家住宅は、江戸時代に村の要職を務め、幕末には士分も有した豪農千葉家の住まいとして使用されてきた。

主屋は家人の居宅と馬の厩舎が一体となった南部曲り家であり、江戸時代に建築され現存しているものとしては最大級の規模である。千葉家の居宅部分には、家族と使用人家族が住まいしていた。馬屋には、馬が飼われ、馬産や駄賃付け、農耕馬などとして用いられ、当初から馬が生活の重要な部分を占めていた。昭和 30 年代以降は、機械化が進み、馬が使われなくなり、昭和 49 年からの一般公開に合わせて、馬屋を展示室に改造し、厩舎として使用されなくなった。平成 25 年の公有化後は居住者もいなくなり、全体が観光施設となった。

附属屋としては、土蔵、石蔵、稲荷社、大工小屋、ハセ小屋、納屋、外便所がある。土蔵は、家財の収納と穀物など食品の貯蔵に使われていたが、農業が行われなくなってからは、物置として使用された。石蔵は味噌や漬物作りに使用されていた。稲荷社は家神として祀られ、信仰の対象とされてきた。大工小屋は、千葉家の建築や修繕に携わった大工の作業小屋及び材料となる木材置き場として利用されてきた。ハセ小屋は、収穫した稲を乾燥させるための丸太であるハセ（稲架）を収納し、農機具などを収納する小屋として利用されてきた。納屋は、昭和 42 年に建て替えられた後、牛や鶏の厩舎兼物置として利用されたが、昭和 49 年の公開後は民具の展示室として使用された。

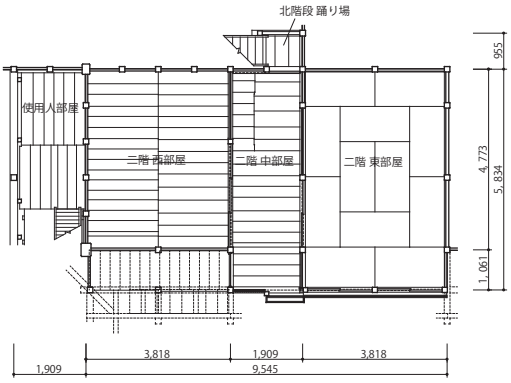
このように、当初は、豪農の生活に伴う住まいとして利用されていたが、昭和 49 年の公開から、住まいながらも観光施設としての性格を強めていき、平成 25 年の公有化後は、全体が観光施設となった。

4　現在の岩手県南から宮城県北を領有した

5　山谷川喜右衛門の略、喜右衛門は代々当主が襲名した

6　近年の家財資料調査により新たに棟札を確認

主屋 1 階 平面図　(1/200)



主屋 2 階 平面図　(1/200)

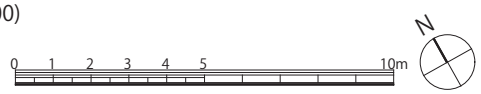
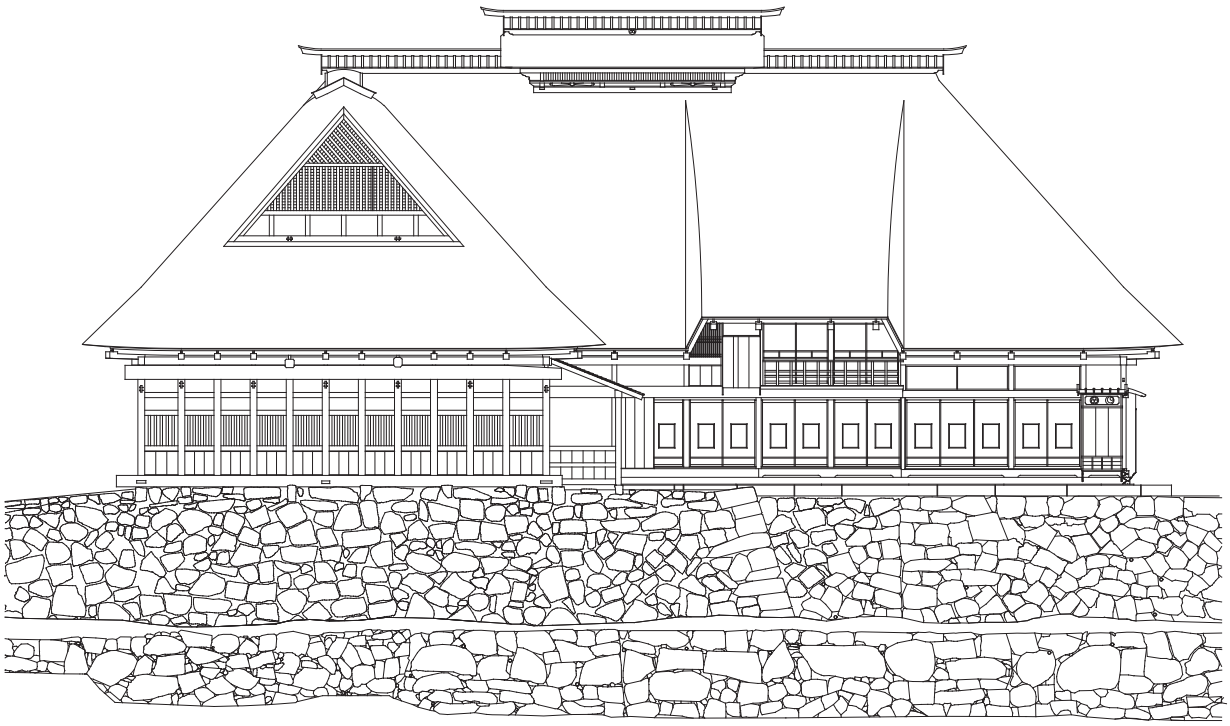
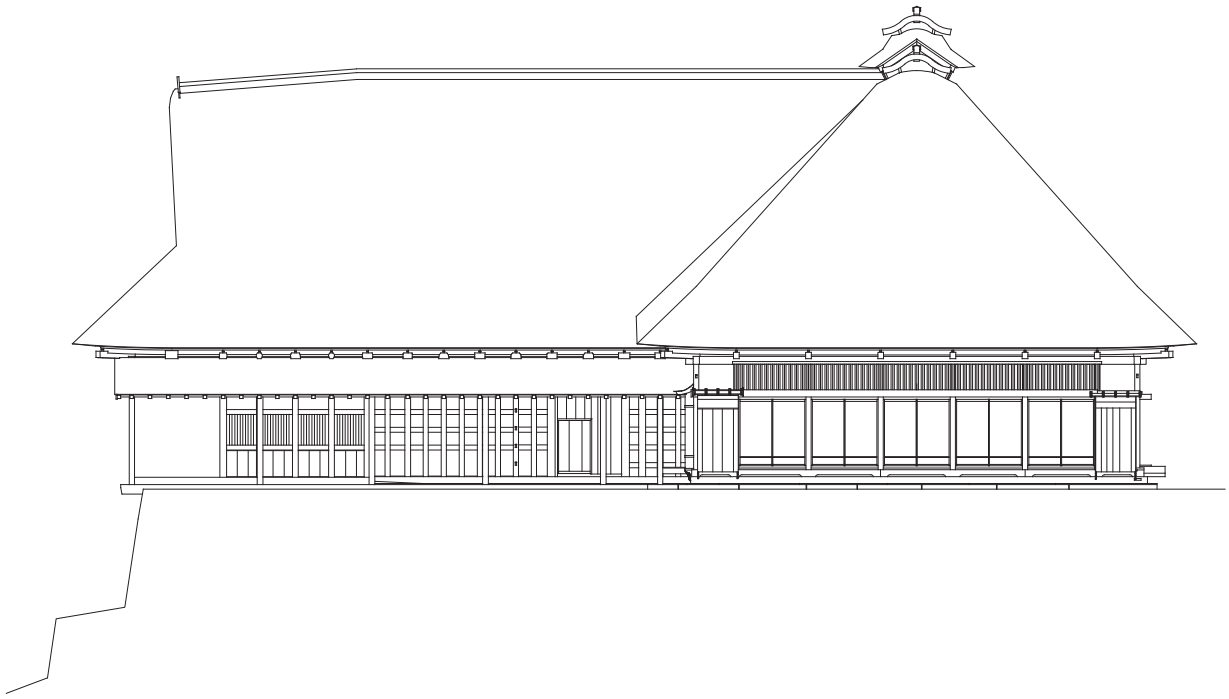


図 1-4　主屋復原平面図

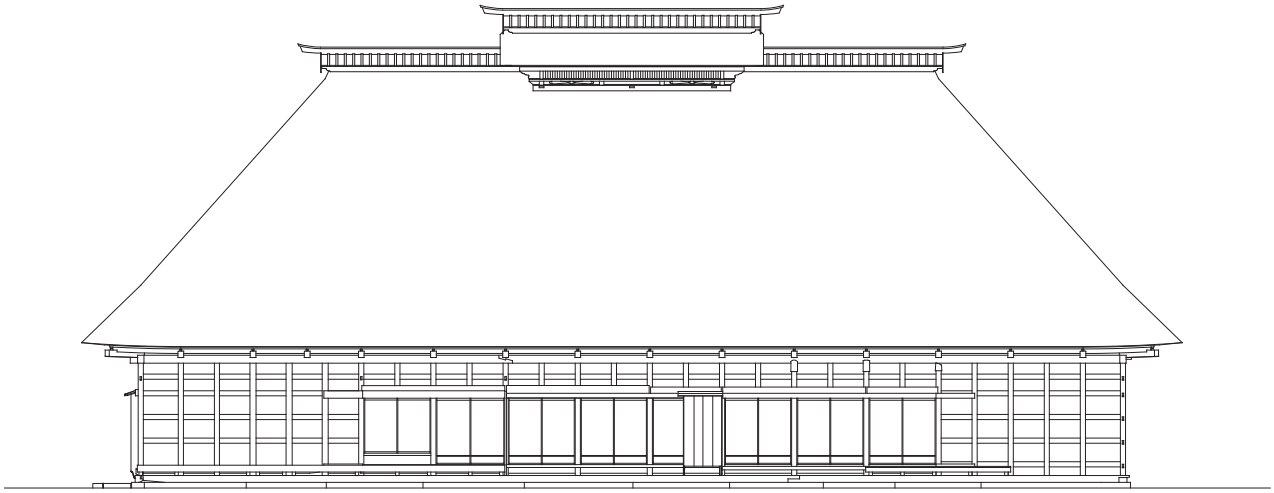


主屋 南立面図 (1/200)

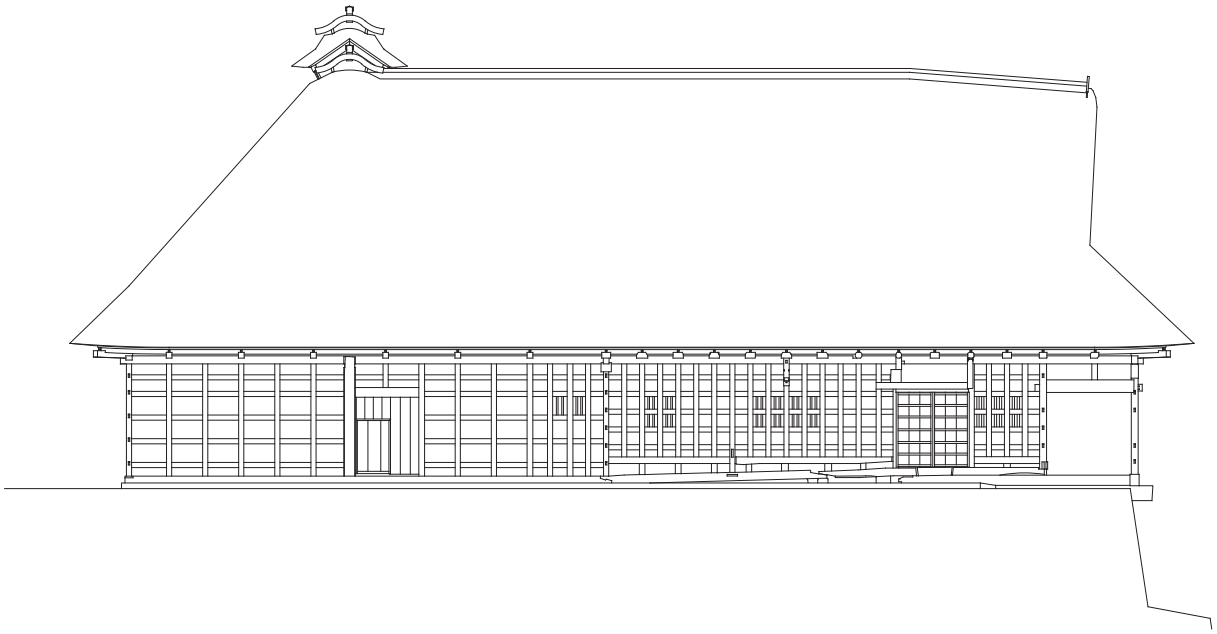


主屋 東立面図 (1/200)

図 1-5　主屋復原立面図 1

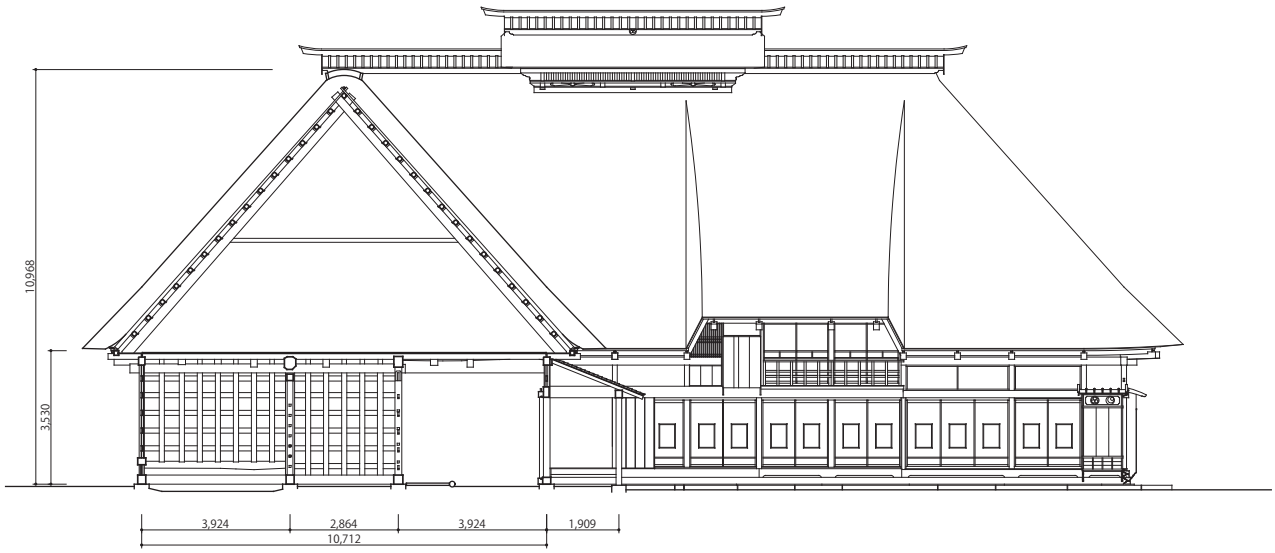


主屋 北立面図 (1/200)

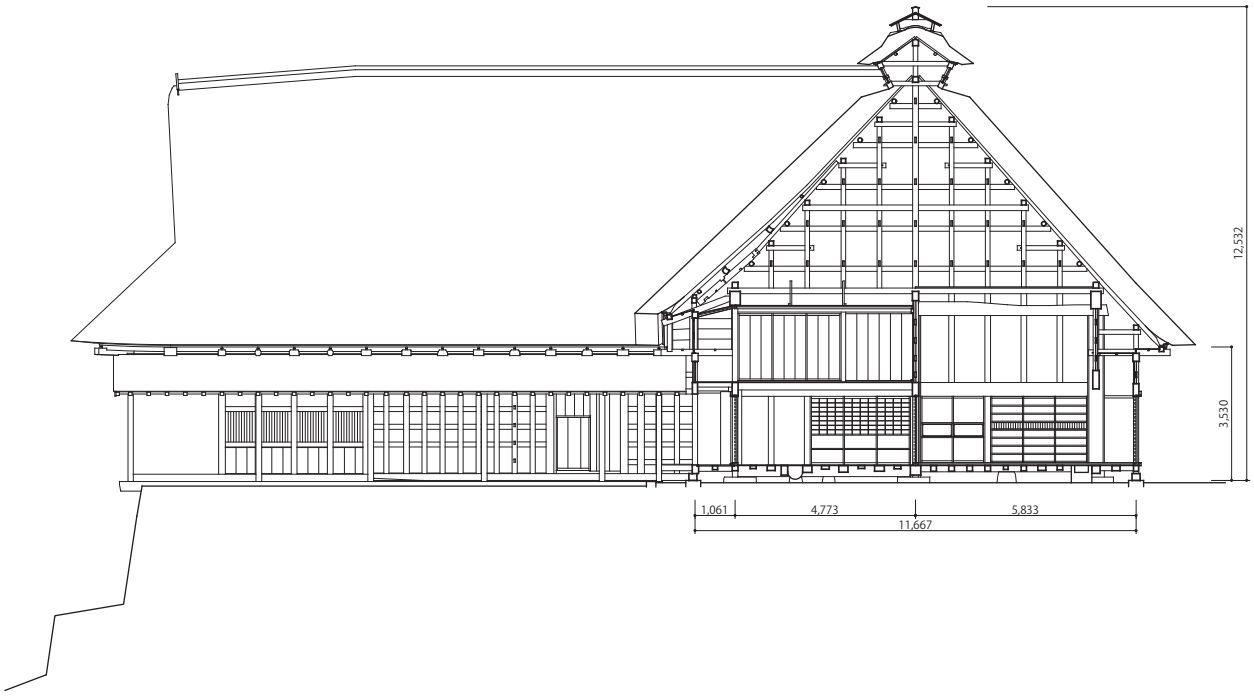


主屋 西立面図 (1/200)

図 1-6　主屋復原立面図 2

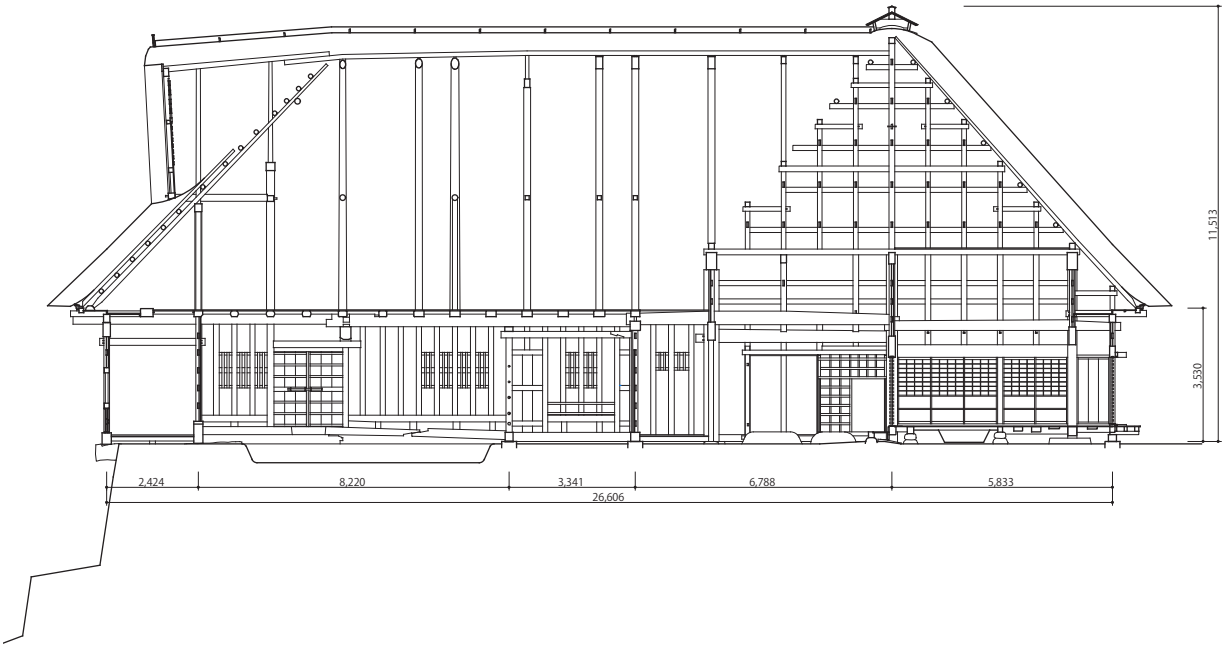


主屋馬屋 梁間断面図 (1/200)

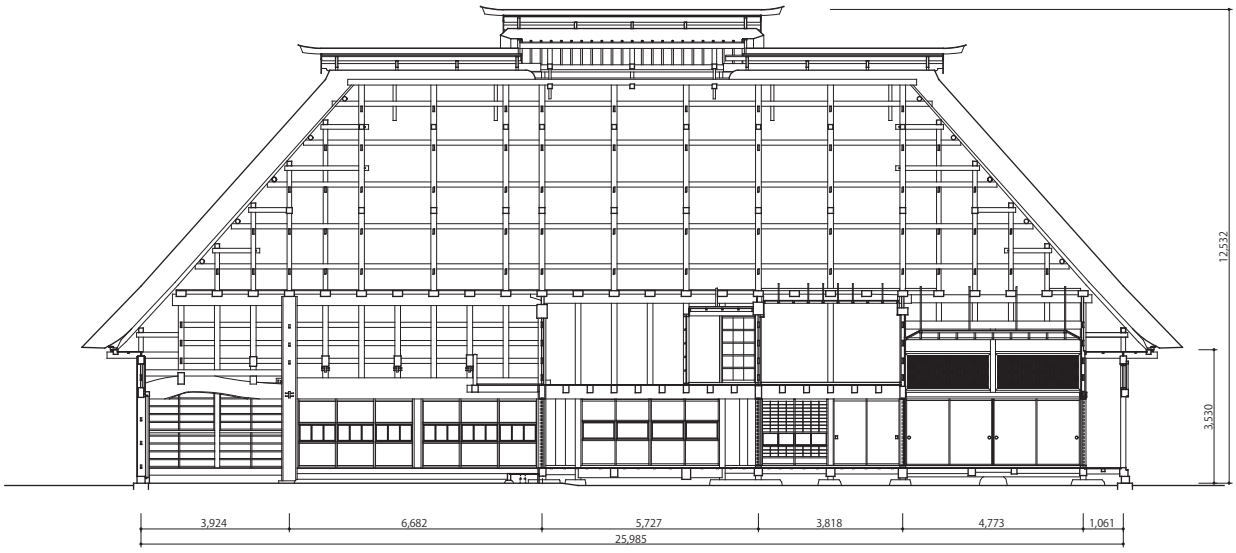


主屋本屋 梁間断面図 (1/200)

図 1-7　主屋復原断面図 1

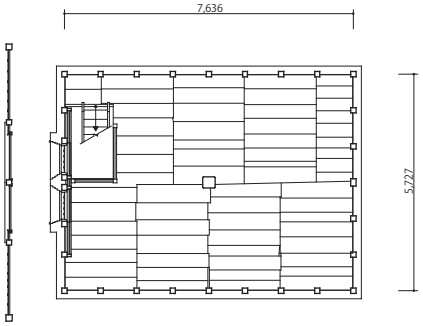


主屋馬屋 桁行断面図 (1/200)

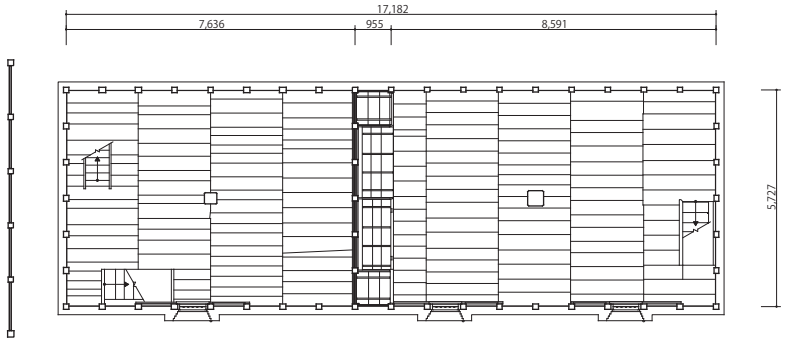


主屋本屋 桁行断面図 (1/200)

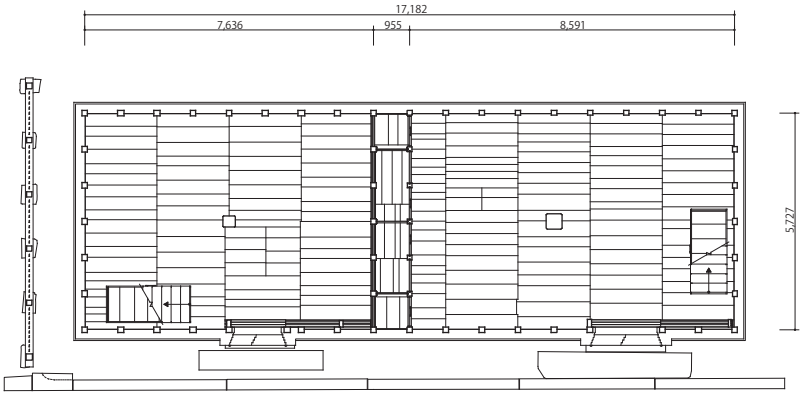
図 1-8　主屋復原断面図 2



土蔵　3 階平面図 (1/200)

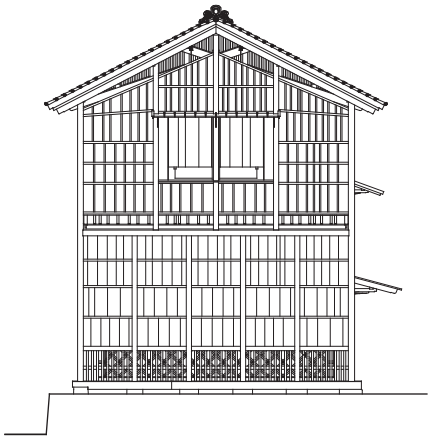


土蔵　2 階平面図 (1/200)

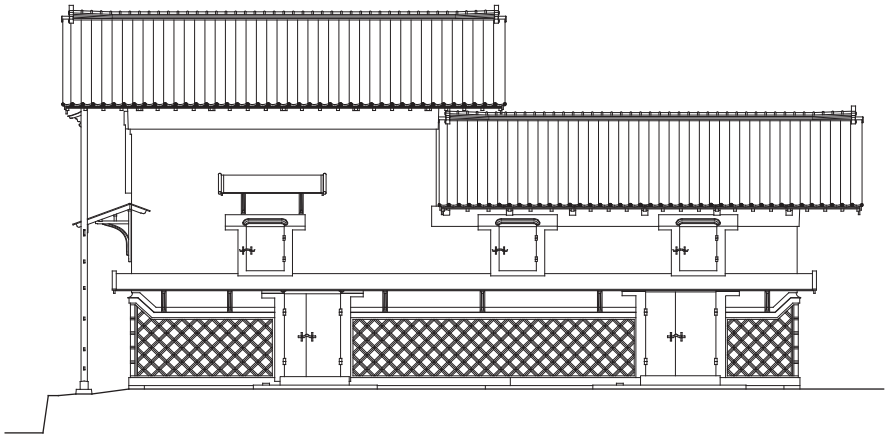


土蔵　1 階平面図 (1/200)

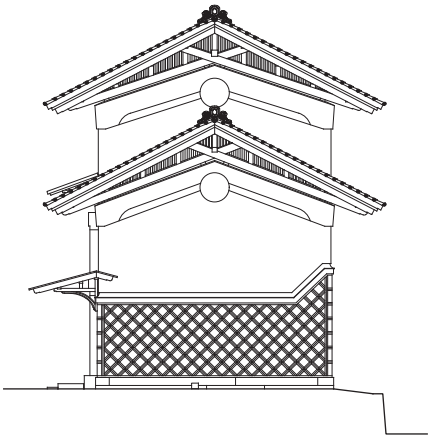
図 1-9　土蔵復原平面図



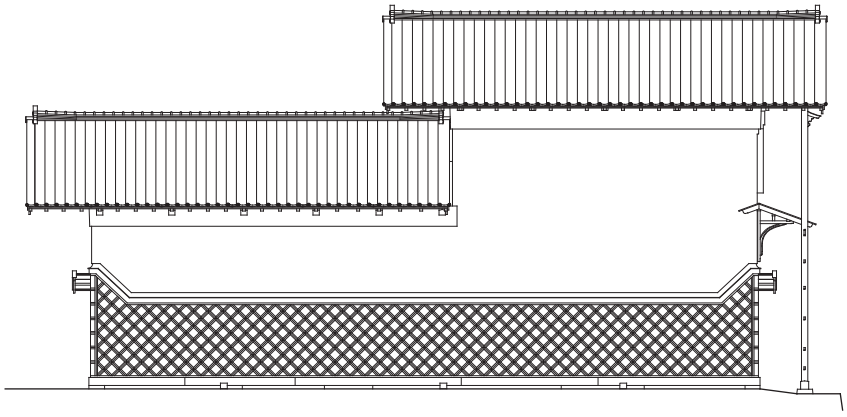
土蔵 南立面図 (1/200)



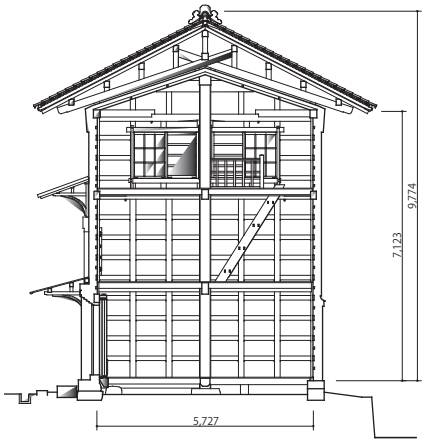
土蔵 東立面図 (1/200)



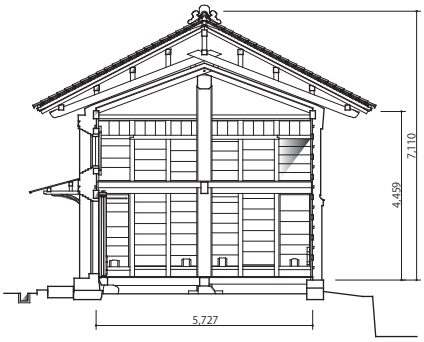
土蔵 北立面図 (1/200)



土蔵 西立面図 (1/200)



土蔵 梁間断面図1 (1/200)



土蔵 梁間断面図2 (1/200)

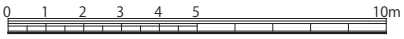
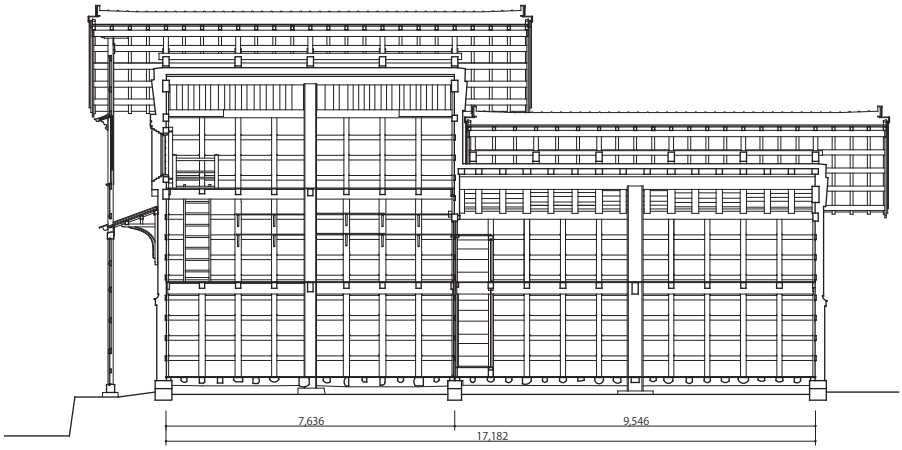
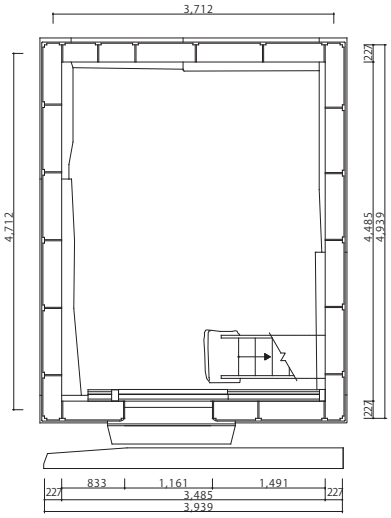


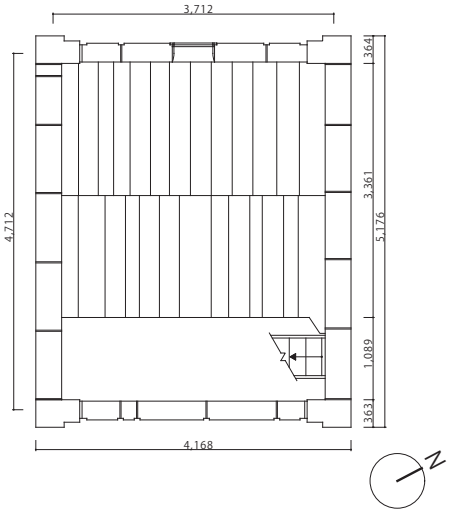
図 1-10　土蔵復原立面図断面図



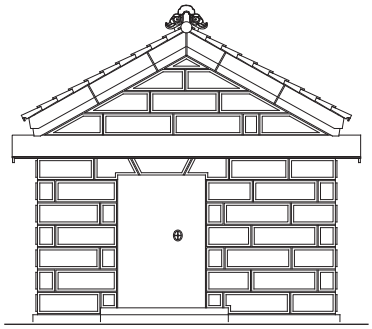
土蔵 桁行断面図 (1/200)



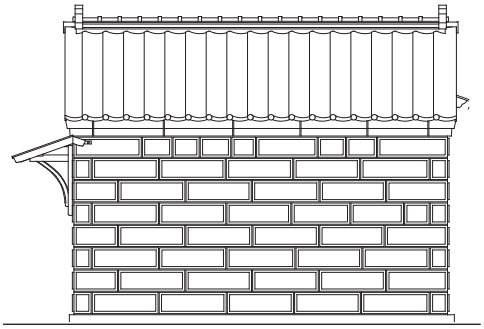
石蔵 1 階平面図 (1/100)



石蔵 2 階平面図 (1/100)

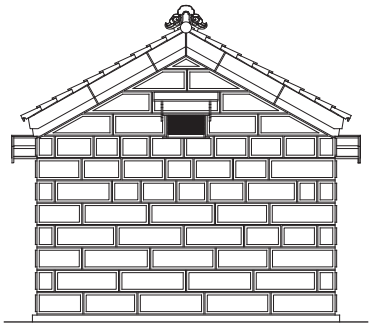


石蔵 東立面図 (1/100)

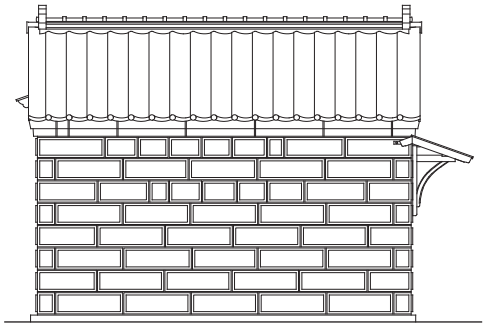


石蔵 北立面図 (1/100)

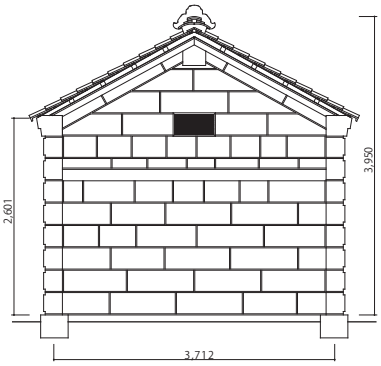
図 1-11　土蔵復原断面図・石蔵復原平面図立面図



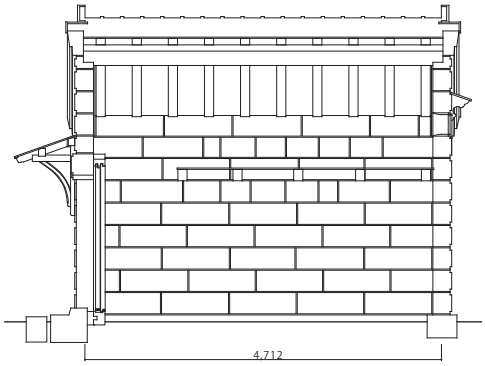
石蔵 西立面図 (1/100)



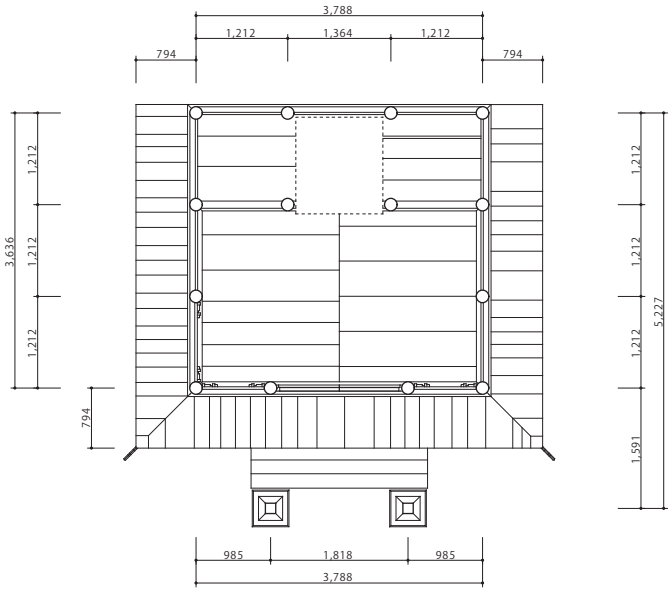
石蔵 南立面図 (1/100)



石蔵 梁間断面図 (1/100)

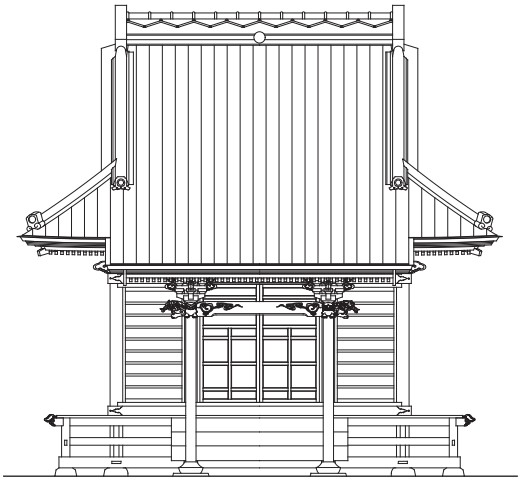


石蔵 桁行断面図 (1/100)

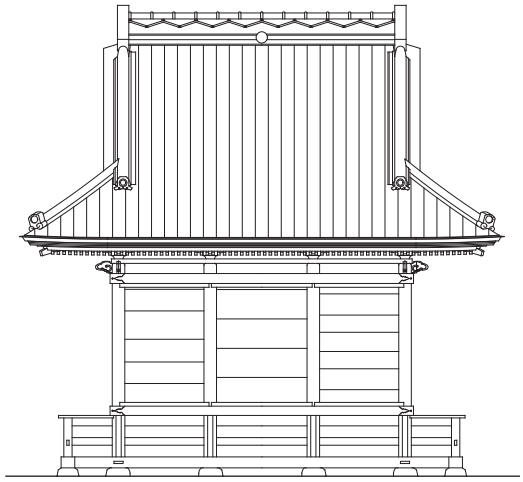


稲荷社 平面図 (1/100)

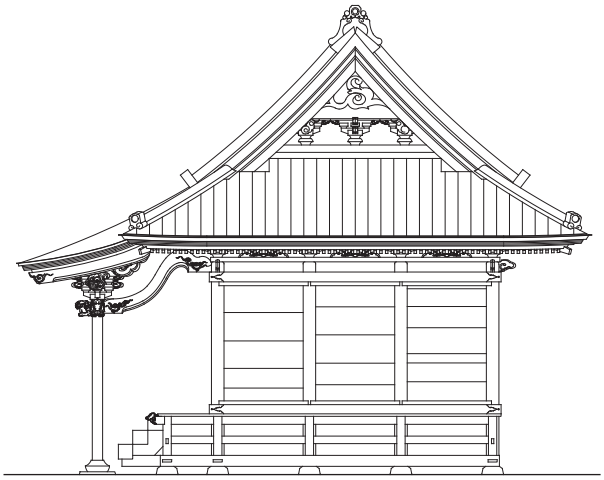
図 1-12　石蔵復原立面図断面図・稲荷社現況平面図



稲荷社 正面図 (1/100)

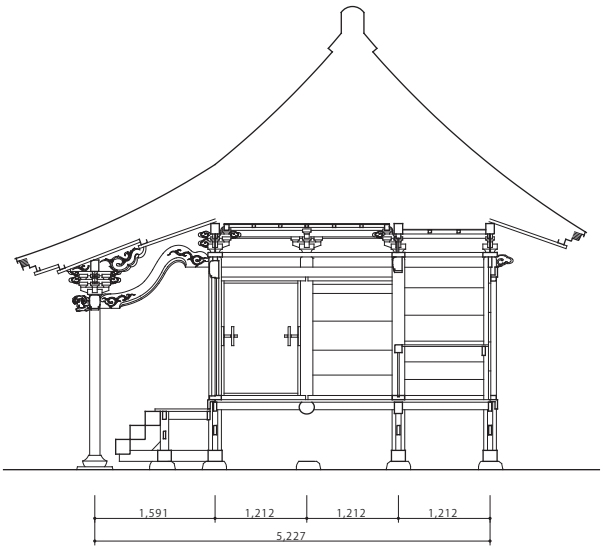


稲荷社 背面図 (1/100)

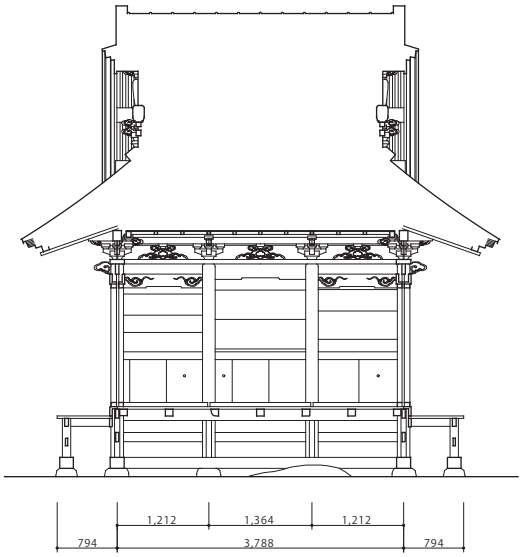


稲荷社 側面図 (1/100)

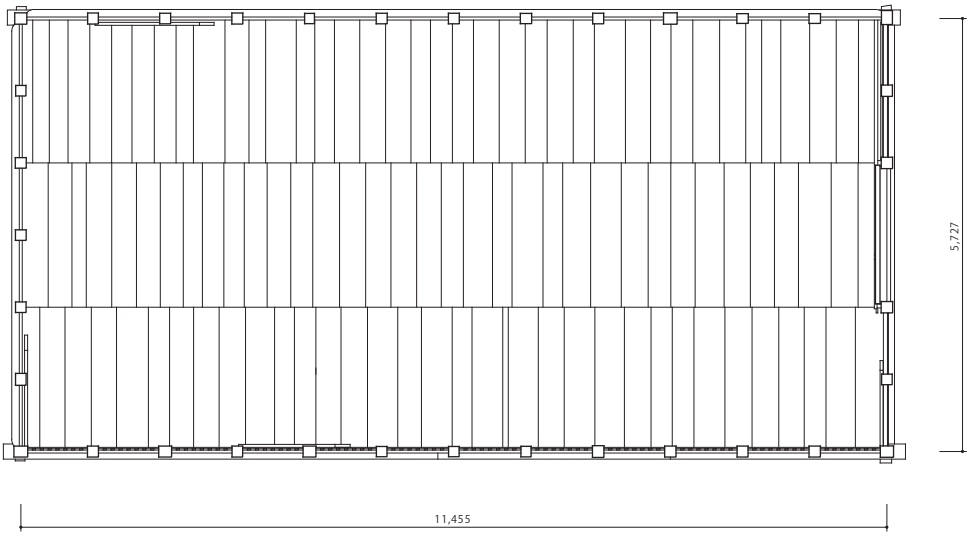
図 1-13　稲荷社現況立面図



稲荷社 梁間断面図 (1/100)

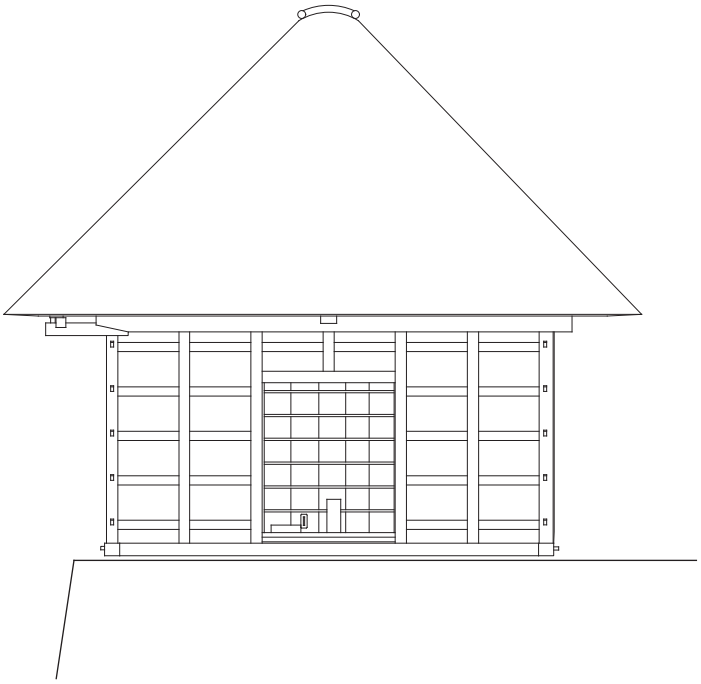


稲荷社 桁行断面図 (1/100)

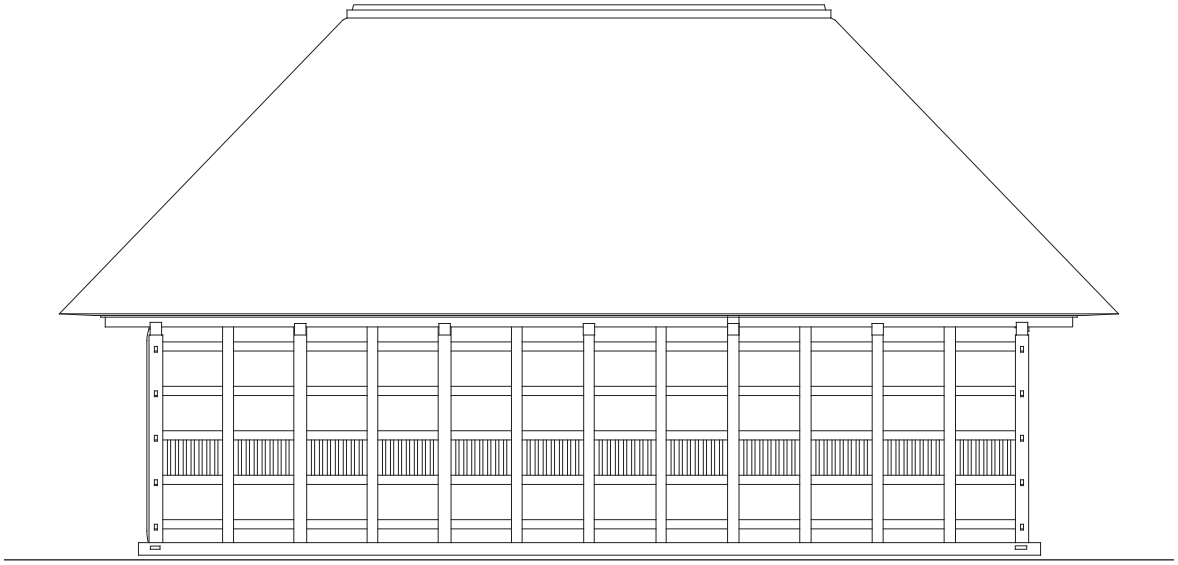


大工小屋 平面図 (1/100)

図 1-14　稲荷社現況断面図・大工小屋現況平面図

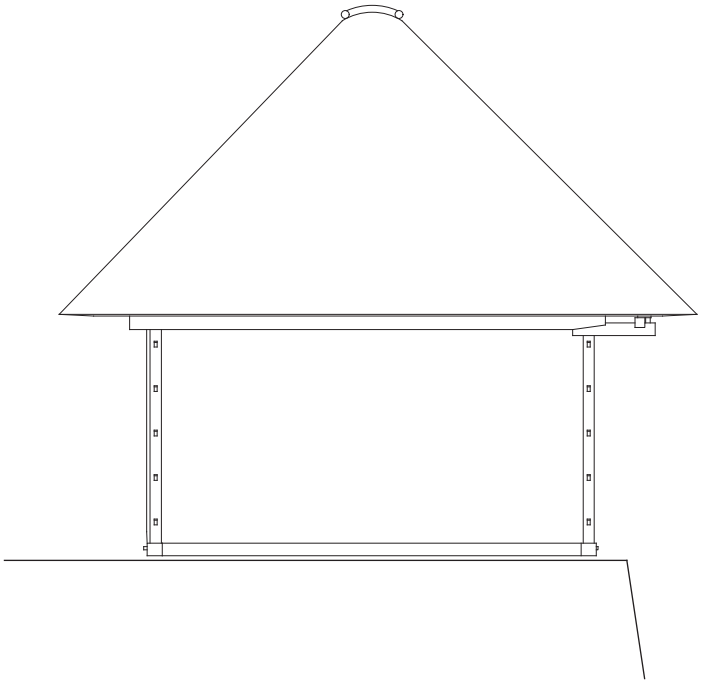


大工小屋 東立面図 (1/100)

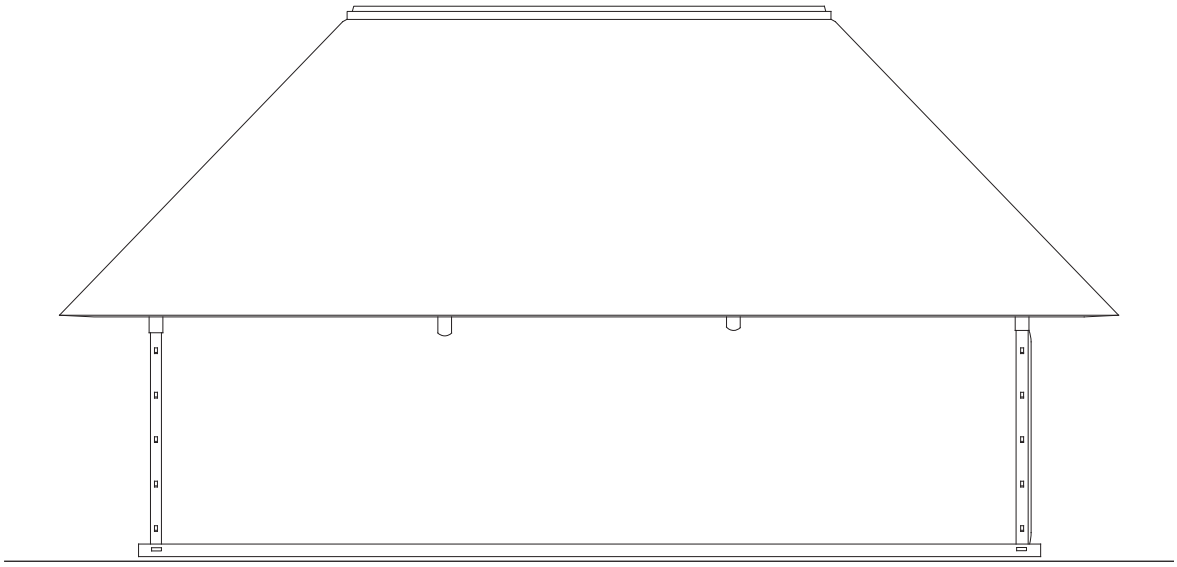


大工小屋 南立面図 (1/100)

図 1-15　大工小屋現況立面図 1

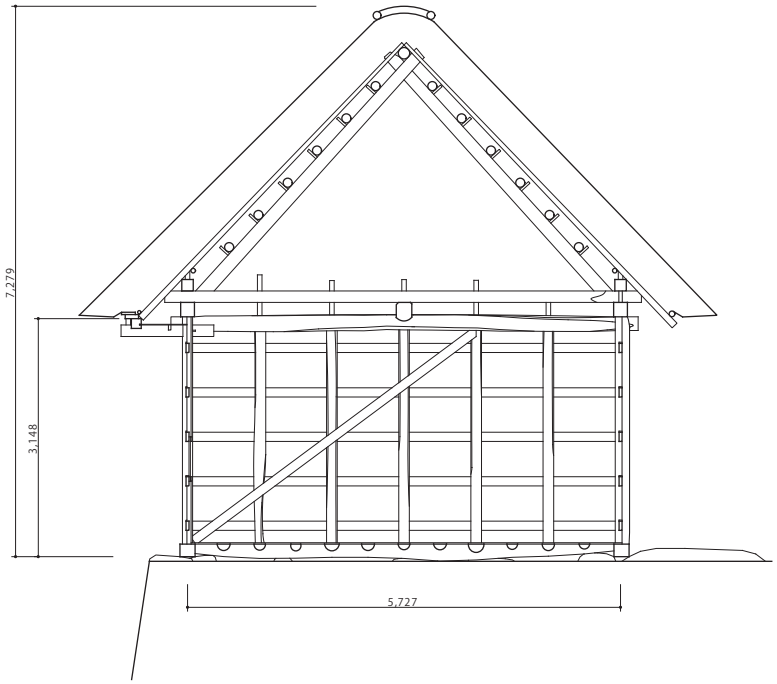


大工小屋 西立面図 (1/100)

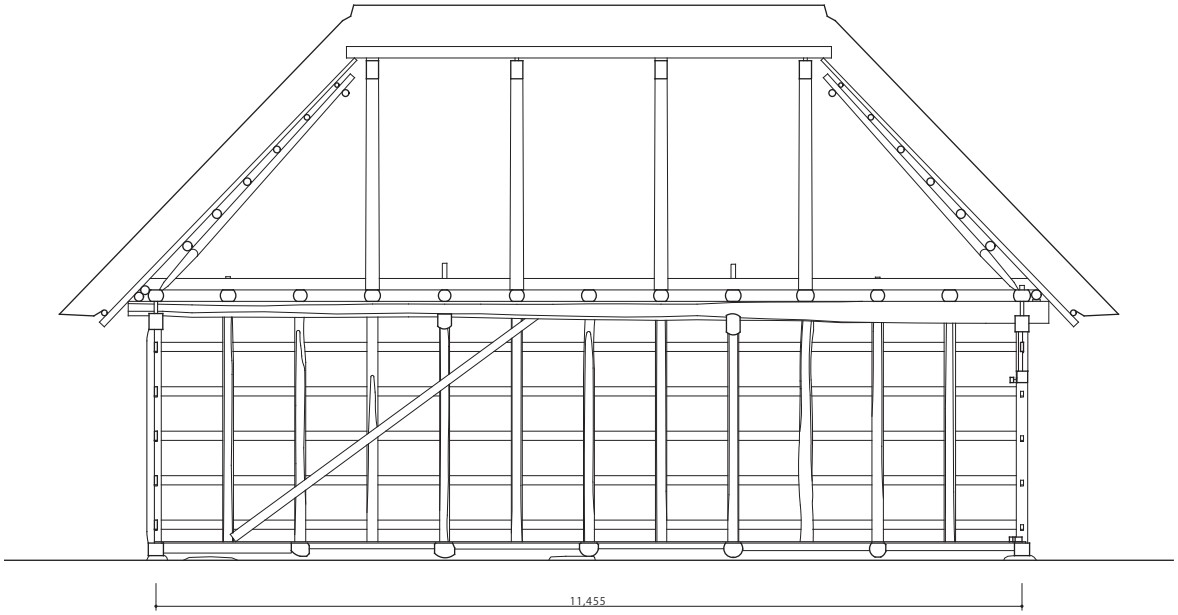


大工小屋 北立面図 (1/100)

図 1-16　大工小屋現況立面図 2

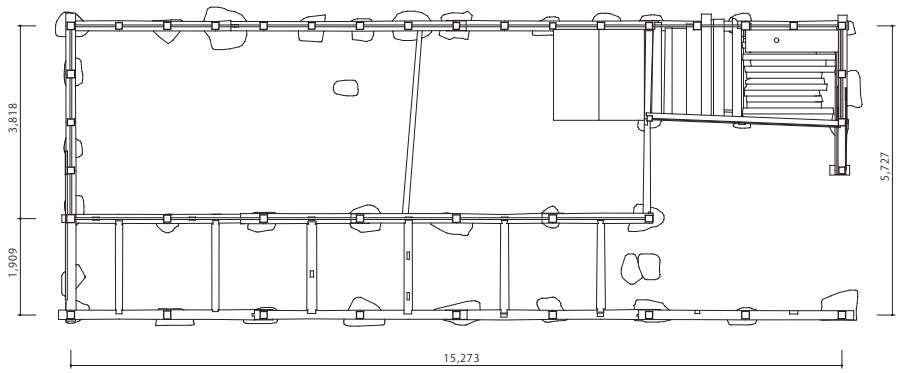


大工小屋 梁間断面図 (1/100)

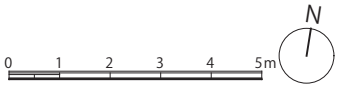


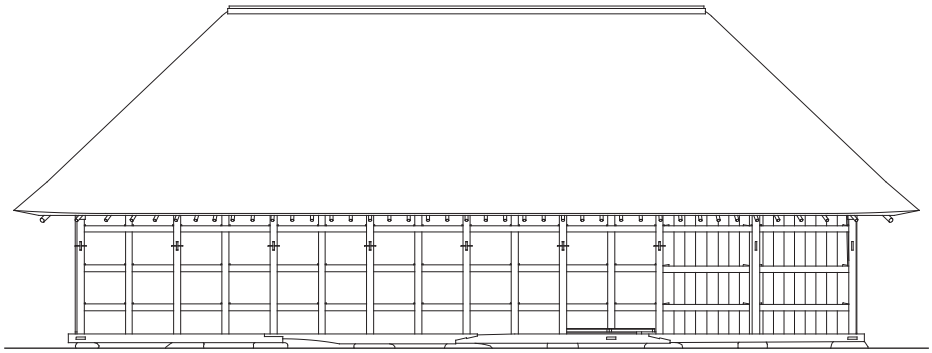
大工小屋 桁行断面図 (1/100)

図 1-17　大工小屋現況断面図

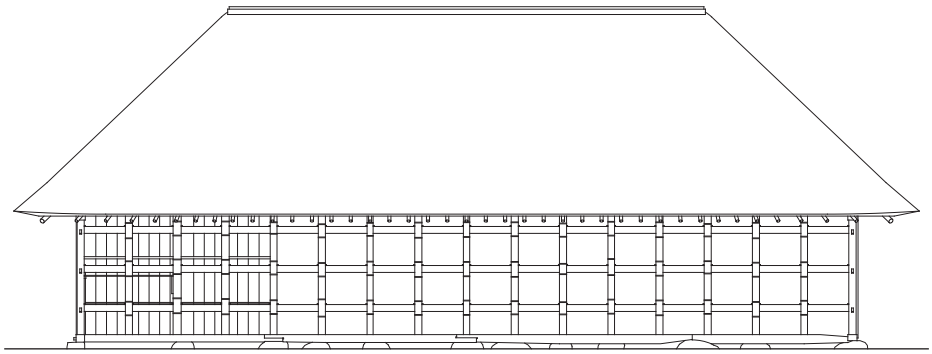


ハセ小屋 平面図 (1/150)



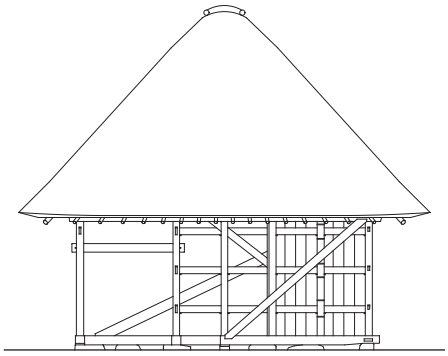


ハセ小屋 南立面図 (1/150)

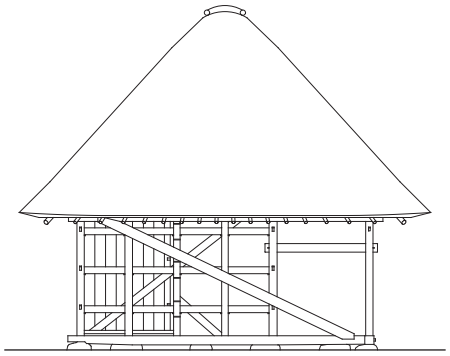


ハセ小屋 北立面図 (1/150)

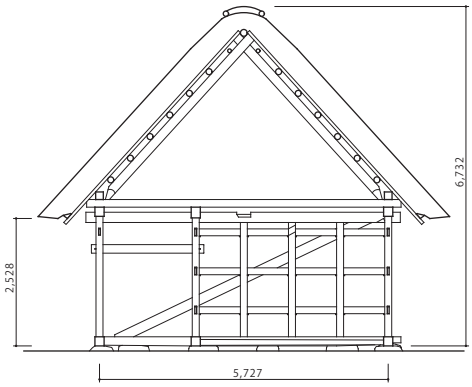
図 1-18　ハセ小屋現況平面図立面図



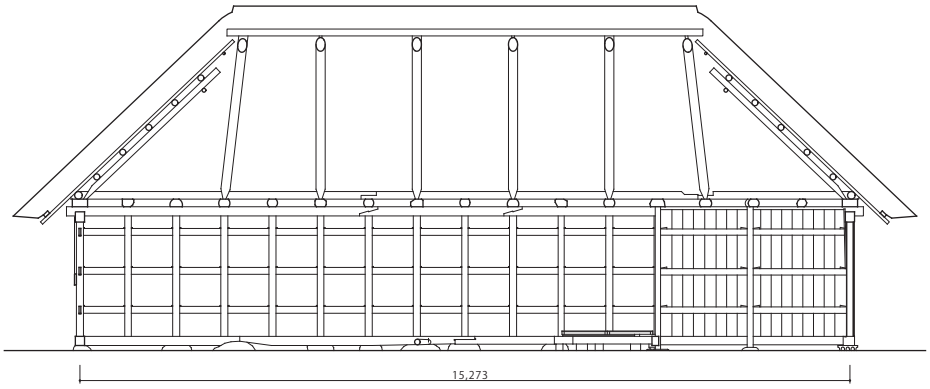
ハセ小屋 東立面図 (1/150)



ハセ小屋 西立面図 (1/150)

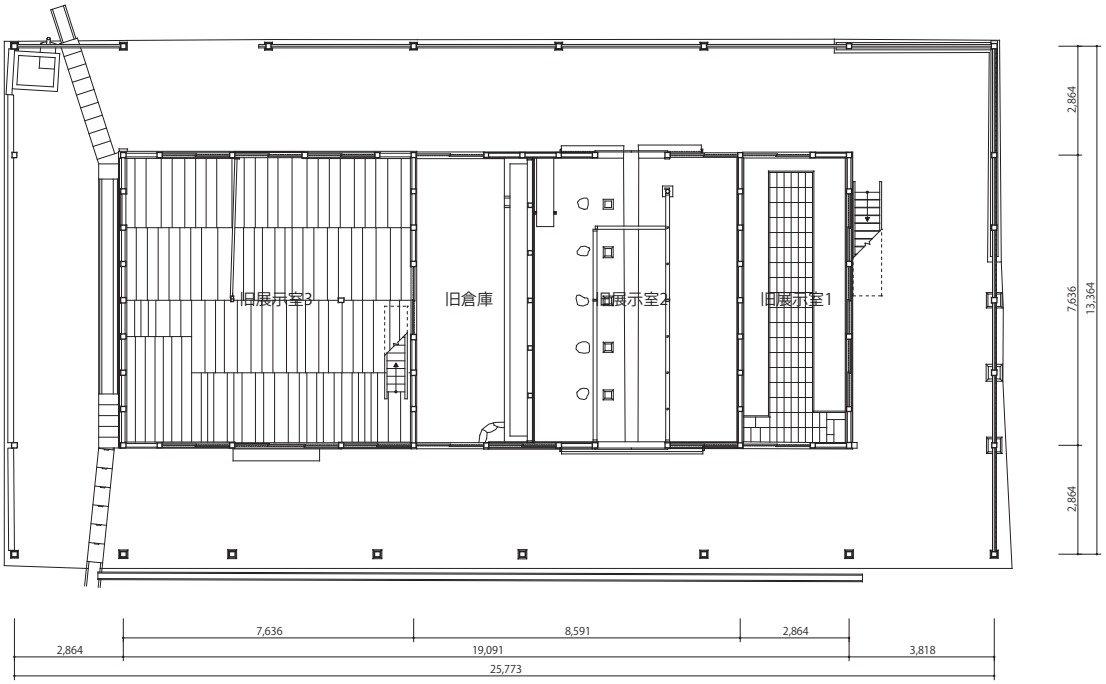


ハセ小屋 梁間断面図 (1/150)

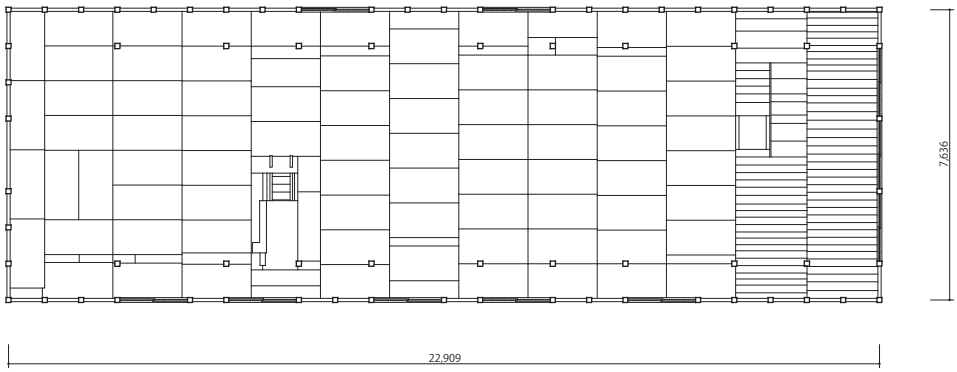


ハセ小屋 桁行断面図 (1/150)

図 1-19　ハセ小屋現況立面図断面図

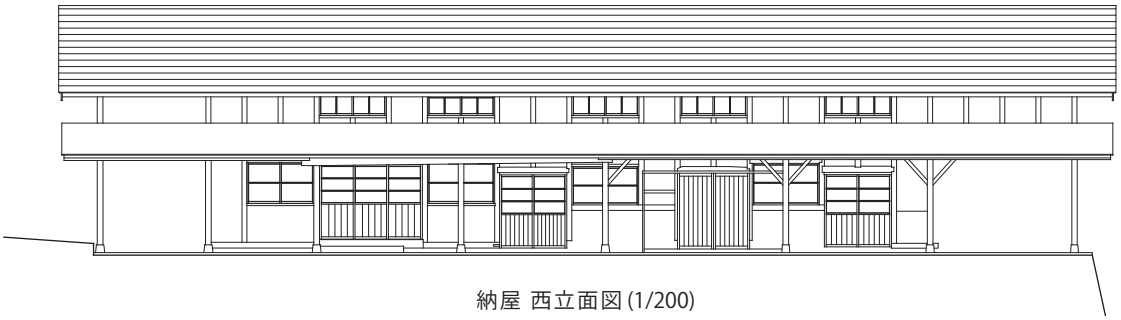


納屋　1 階平面図 (1/200)



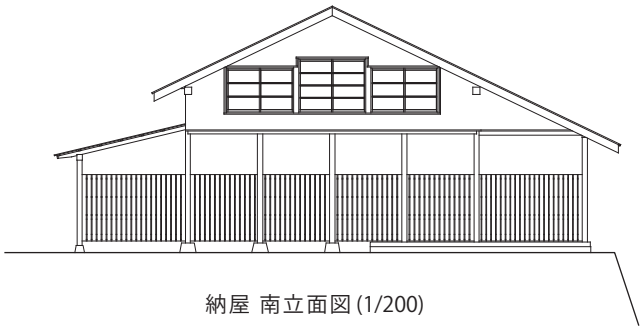
納屋　2 階平面図 (1/200)

図 1-20　納屋現況平面図

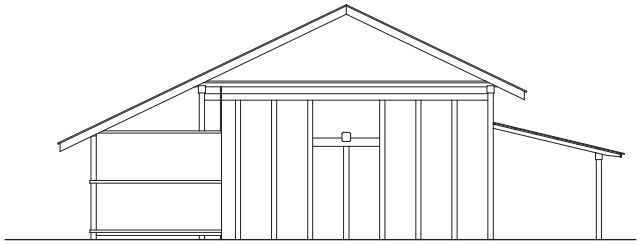


納屋 西立面図 (1/200)

納屋 東立面図 (1/200)

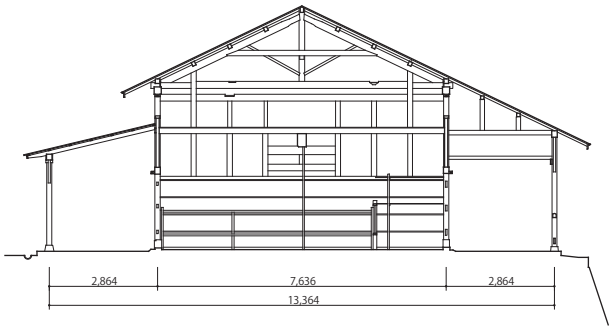


納屋 南立面図 (1/200)



納屋 北立面図 (1/200)

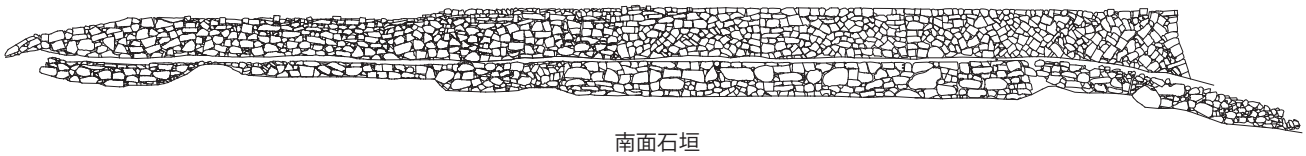
図 1-21　納屋現況立面図



納屋 梁間断面図 (1/200)

納屋 桁行断面図 (1/200)

図 1-22　納屋現況断面図



南面石垣

大工小屋石垣

稲荷社正面石垣

稲荷社階段石垣

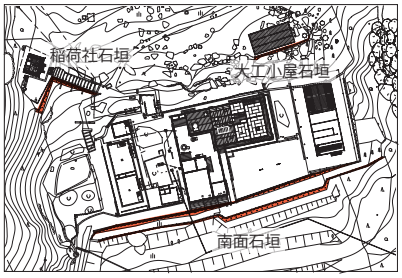


図 1-23　石垣修理前立面図（1/500）

写真 1-1　鳥居現況写真

3　文化財の価値

参考：指定説明文

千葉家住宅　5 棟

主屋、土蔵、石蔵、稲荷社、大工小屋、土地

岩手県遠野市綾織町

個人

千葉家は遠野市西郊の山麓に所在し、南斜面を造成して築いた石垣上に小城のような屋敷を構える。

千葉家の由緒は詳らかでないが、江戸中期には農業を営んでいたとみられ、江戸末期に士分格を得、天保の飢饉の際に、四代喜右衛門が救済普請として主屋などを建設したと伝える。

宅地の前面に長大な石垣を野面に積み、中央に主屋を南面して構える。大工小屋とハセ小屋も主屋と同じころに建てられたとみられ、その後、嘉永 2 年（1849）に稲荷社が建てられ、明治 45 年（1912）に土蔵、大正末期に石蔵が建てられて屋敷構えが整い、さらに昭和 42 年に納屋が改築された。

主屋は曲り屋形式で、桁行 25.9 メートル、梁間 11.7 メートルの本屋の正面西側に、桁行 14.7 メートル、梁間 10.5 メートルの馬屋を突出させる。本屋の馬屋接続部に玄関を設け、馬屋側には大戸口を開く。また馬屋東面に桟瓦葺の庇を付け、玄関への通路とする。

床上部は二列構成で、中廊下の表側をチャノマとナカマ、奥側をジョイとウラザシキに分ける。東側にイリザシキとオクザシキの続き座敷を配し、東南面には縁を廻らす。オクザシキには床、棚を設け、イリザシキとオクザシキの天井は面皮の棹縁を用いて折り上げ、瀟洒につくる。またチャノマとナカマの二階に二室を設ける。室内は障子や襖などで間仕切り、外周には雨戸を建てる。

土間は、後方に間仕切を設けてダイドコロなどとし、前方は内部を改装して展示室や便所等とする。

屋根は茅葺で、本屋は寄棟造とし、正面中央部分を兜屋根状に切り上げる。馬屋正面は入母屋造で、木格子の妻飾を見せる。

土蔵は、土蔵造 2 階建、一部 3 階建、桁行 17.1 メートル、梁間 5.8 メートル、切妻造、桟瓦葺である。1・2 階は内部を 2 室に間仕切り、1 階周囲を海鼠壁とする。

石蔵は、石造、二階建、桁行 4.9 メートル、梁間 3.9 メートル、切妻造、桟瓦葺である。躯体は江戸切仕上げの石積で、一階を土間とし、味噌蔵としている。

稲荷社は、桁行 3.8 メートル、梁間 3.7 メートル、入母屋造、正面 1 間向拝付、鉄板葺で、下方の参道に鳥居が建つ。

大工小屋は主屋背後の石垣上に建ち、桁行 11.5 メートル、梁間 5.7 メートル、寄棟造、茅葺である。南面各間に採光窓を開け、残る 3 面は出入口を除き土壁とする。

ハセ小屋は、桁行 15.3 メートル、梁間 5.7 メートル、寄棟造、茅葺である。内部は土間で、周囲吹き放しとし、農作業用の丸太などを収納した。

千葉家住宅主屋は、南部曲り屋の分布域南縁に位置するとともに、遠野地方に典型的な平面をもち、洗練された座敷意匠を採用するなど、江戸末期の大型曲り屋民家として価値が高い。

また主屋周囲には、江戸末期から大正期にかけて建設された附属建物が残り、その特異な敷地構成とともに豪農の屋敷構えをよく保持しており、宅地と併せて保存を図る。

参考文献

『千葉家住宅調査報告書』遠野市教育委員会、2006 年

『月刊 文化財』12 月号（531 号）平成 19 年 12 月 1 日発行　より

(1) 主屋の価値

①　地域を支えた豪農の家

主屋は、居宅空間である本屋の正面向かって左側に馬屋が取り付く曲り家形式の民家である。

本屋は、食い違い六間取の居室中央奥にジョウイ（常居）を構え、遠野地方の大型曲り家に典型的な間取りをもつ。加えて、江戸時代の現存曲り家としては最大級の規模である点、上手のイリザシキ（入

座敷）とオクザシキ（奥座敷）の天井を面皮の棹縁を用いて折上げる洒落た座敷意匠、増築により規模を拡大した馬屋南端部が石垣から迫り出す豪快な意匠など、通常の上層民家とは異なる最上層の豪農居宅としての風格と威厳を備える。また、本屋と馬屋は小屋組の構造[7]や壁下地の作り方において、明確に格差を意識している点も注目される。なお、幕末期の馬屋の増築は、救済普請としての意図もあったと伝えられている。

②　用途に応じた生活空間を演出する居宅部

本屋の中心的な部屋であるジョウイは主人の日常的な居室で、千葉家では執務室兼応接室のような使われ方をしていたと考えられる。千葉家住宅のジョウイは、高い天井を持つ広大な空間、その空間を支える太い柱と差鴨居、経年を示す煤けた小壁や天井板などによって、豪農住宅の主人居室としての荘厳な雰囲気や歴史性を感じ取ることができる。

ジョウイの東隣にはウラザシキ（裏座敷）があり、当主とその家族の寝部屋に使用されていた。この部屋は最上室（オクザシキ）の西隣にあたるが、両者の室境は壁で遮られて直接往来できない。つまり、ウラザシキはナンド（納戸＝寝部屋）にあたる部屋である。ただし、通常ナンドは開口部が少なく薄暗い部屋だが、ウラザシキは長押と棹縁天井を備え背面側に開口部を設け障子が入り、壁は色土仕上げで床は畳敷きとするなど上等な部屋として造られている。すなわち豪農の当主一族の寝部屋として相応しい座敷的な設えになっている。

現在は、ジョウイから階段を上ると二階へと通じる。二階東部屋は当初は物置的な薄暗い部屋で、チャノマから昇降していたが、明治 42 年頃に採光のため屋根を切上げ、座敷的な部屋へと改造した。これは当主の長男が妻を迎えた時と一致することから、若夫婦の居室として改造したと考えられ、当時の生活形態の変化の様子を表している。

イリザシキとオクザシキは続き座敷で、冠婚葬祭など特別な時に使用され、それ以外の時は雨戸が閉めきられ、昼間でも薄暗い部屋であったという。柱は欅材を用い、長押、天井棹縁には数寄屋意匠の面皮材を多用する。天井は折上げる形式で、特にオクザシキは天井板を矢筈張という凝った仕上げとする。このようなつくりによって、豪農千葉家のハレ（晴）の空間であることを認識することができる。

③　馬とともに暮らす曲り家空間

ダイドコロは馬屋を見通せる位置にあり、大きな囲炉裏を囲んで家族が食事をとった。この大きな囲炉裏の他にダイドコロには、もう一つ炉がある。天井が高い大きな部屋で極寒の遠野の冬を生き抜くため設置されたのであろう。ハシリは流しとして利用された空間で、北半が板敷、南半は石敷であった点が特徴である。石敷だった理由は明確ではないが、排水や湿気に配慮したものらしい。

ウチニワには、馬釜と竈を設ける。特に馬釜は巨大で、土間を掘り込んで建築当初から設置されているもので、馬のエサ（飼料）であるハギ（萩）を煮たり、味噌作りのために大豆を大量に煮たりした。巨大な馬釜は、馬と生活していた豪農千葉家の曲り家の性格を特徴付けるものと言える。

馬屋は広い１室（マヤ 1）と狭い２室（マヤ 2、3）の計３室で構成されている。狭い部屋には、仔馬などを入れたという。この巨大な馬屋は、駄賃付けで財を成した千葉家の暮らしの大きな部分を馬が占めていたことを物語る。

ロウカは、千葉家住宅の馬屋が石垣から張り出す増築時に、主屋西側からホラマエへ人や馬が通り抜けるために設けられたもので、普通の曲り家には無い特徴である。石垣側一面に連子窓が設けられ

7　本屋は束・梁・貫構造を主体に叉首を併用するが、馬屋は単純な叉首組とする

写真 1-2　石垣から迫り出す馬屋（修理前）

写真 1-3　馬屋　左側三間が増築部分（修理前）

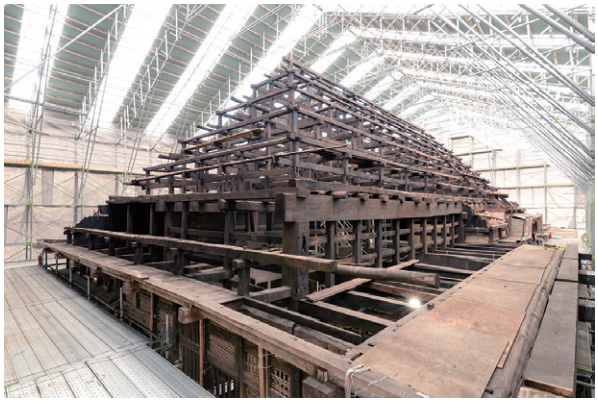


写真 1-4　本屋の小屋組（修理中）

写真 1-5　馬屋の小屋組（修理前）

写真 1-6　ジョウイ（修理中）

写真 1-7　イリザシキとオクザシキ（修理前）

写真 1-8　オクザシキの天井（修理前）

写真 1-9　ダイドコロから馬屋を見る（修理前）

ており、かつて辺り一帯が千葉家の所有地であったとされる、石垣下に広がる景色を眺めることができる。

このように、千葉家住宅主屋は、江戸時代に建築された南部曲り家として典型的な様式を踏襲しながらも、その規模の大きさ、立地を生かした設計、それを実現した技術力の観点からも「南部曲り家の頂点」と呼ぶにふさわしい価値を有する。

（2）主屋を取り巻く附属建物等の価値

主屋周囲には、土蔵、石蔵、稲荷社、大工小屋、ハセ小屋などの江戸末期から大正期にかけての附属建造物が残る。いずれも、豪農としての繁栄の名残を留めるもので、敷地前面に築かれた壮大な石垣とともに、豪農の屋敷構えをよく保持している。以下に各建物の価値を簡潔に述べる。

①　土蔵

土蔵は、江戸時代の土蔵[8]を解体した部材を再利用して、明治 45 年（1912）から大正 2 年（1913）にわたって建て替えている。そのため、二階建と三階建が接続して[9]一体の建物とする点に特徴があり、そのような建築は当地では類を見ない。前面の風雨雪を防ぐ板壁、および土蔵外周の腰部に設けた海鼠壁は、屋敷の景観を大きく特徴付ける要素の一つとなっている。

②　石蔵

石蔵は、宮城県塩竈市で産出された凝灰岩（通称塩竈石）を用いて、大正 14 年（1925）に味噌蔵として建築された。室内の急な温度変化を防止するため、壁体に塩竈石を用いたり瓦葺屋根の下地に土塗りしたりして断熱性に工夫を凝らしている。石造の蔵は遠野市及び花巻市、奥州市に散見されるが、千葉家住宅の石蔵同様の規模・形状・仕様のものが現存することは確認されていない。

③　稲荷社

稲荷社は、屋敷の西北方に石垣を築き独立して配置し、石造の鳥居（附）を構える。社殿は棟札により元治元年（1864）建築と判明する。方三間で正面に向拝を設け、欅材を用い、絵様刳形を随所に施す。農家の氏神社としては規模が大きく良質で、同様な規模形式の氏神社は当地においては他に例を見ない。

④　大工小屋

大工小屋は、主屋東北方の一段高い造成地に建つ。大工などの職人の作業小屋兼資材置場で、間仕切りの無い大空間が特徴である。大壁構法や軸組・架構の特徴などからみて、主屋と同じ江戸末期頃の建築と考えられる。土壁は各面により異なる仕様が認められる。大工小屋という性格上、主屋建築に先立って建築されたと想定されるので、壁仕様の多様さは技術の試行を示すのかもしれない。

⑤　ハセ小屋

ハセ小屋は、主屋・土蔵の建つ造成地の西南手前に設けた尾根上敷地に単独で建つ。この場所はかつて前身の千葉家主屋が建っていたと伝わる。現在の主屋と同じ頃に建てられたといわれ、ハセ（稲架）と呼ぶ収穫した稲を干す丸太と農具などを収納した。壁も床も無い小屋であるが、近隣のハセ小屋例よりもかなり大規模で本格的な建物であることが特徴である。

⑥　納屋

納屋は、主屋と同じ造成地の東端に建つ。同じ位置にあった江戸末期頃の茅葺の納屋を原形として、昭和 42 年に屋根形式・基礎・内部間仕切・建具など全面的に改築した。改築後は牛小屋、鶏小屋、納屋に使用した後、昭和 49 年の住宅公開後は展示室として利用した。主要構造部の一部に前身建物

8　現存の土蔵と同じ場所にあった 2 階建の前身土蔵のこと

9　双方は屋内において通じていない

写真 1 -10　土蔵（竣工）

写真 1-11　石蔵（竣工）

写真 1-12　石蔵の屋根（修理中）

写真 1-13　稲荷社（修理前）

写真 1-14　大工小屋（修理前）

写真 1-15　大工小屋の三種類の壁下地（修理中）

写真 1-16　ハセ小屋（修理前）

写真 1-17　納屋（修理前）

と推定される転用材が用いられているが、改変が大きい。そのため、改築前の姿を復元することは困難であるが、これらの痕跡が千葉家における生業の変遷を物語っており重要である。

（3）宅地の価値

上述のように、主屋を中心とした千葉家住宅の建物群は、花崗岩の転石を多く含む緩斜面を盛土によって造成した土地に展開する。

ここで主屋、土蔵、納屋は前面に壮大な石垣を築いた最も広い造成地に横並びに建ち、石蔵を土蔵後方に配置する。また、大工小屋、稲荷社はそれぞれ別個に石垣積して造成した敷地に建つ。ハセ小屋は、以上の諸建築の敷地手前に独立して建つ。

こうした敷地構成の特徴は、江戸時代末期に既に整っており、現在もその姿をよく留めている。千葉家住宅は、こうした大規模な敷地造成工事を経て段階的に建築が整えられてきた様相がわかる点が特徴で、重要である。

（4）景観的な価値

これらの屋敷を対岸から俯瞰すると、石垣の上に聳える小城のようで、周囲の山林や農地とともに稀に見る豪壮な景観をよく保持している。また、小高い屋敷からは、山谷川流域の農村景観が一望でき、視点場としての価値も高い。

写真 1-18　千葉家住宅遠景

写真 1-19　千葉家住宅からの眺め

写真 1-20　ふるさとの歌まつり（昭和 46 年）

写真 1-21　千葉家まつり（平成 27 年）

<table>
<tr><th colspan="8">重要文化財千葉家住宅の価値</th></tr>
<tr><th colspan="3">主屋の価値</th><th colspan="2" rowspan="2">主屋を取り巻く
附属建物等の価値</th><th rowspan="2">宅地の価値</th><th rowspan="2">景観的な価値</th></tr>
<tr><th>地域を支えた豪農の家</th><th>用途に応じた生活空間
を演出する居宅部</th><th>馬とともに暮らす曲り家空間</th></tr>
<tr><td rowspan="4">・ 遠野地方の大型曲り家に典型的間取り
・ 江戸時代の現存曲り家として最大級の規模
・ 洒落た座敷意匠
・ 馬屋が石垣から迫り出す豪快な意匠
・ 通常の上層民家とは異なる豪農居宅の風格と威厳
・ 救済普請の痕跡</td><td rowspan="4">・ 荘厳な雰囲気のジョウイ
・ 当主一族の寝部屋に相応しい造りのウラザシキ
・ 生活形態の変化を表す2階東部屋の座敷的設え
・ ハレの空間としてのオクザシキ、イリザシキ</td><td rowspan="4">・ ウマヤを見通す大きな囲炉裏があるダイドコロ
・ 石敷きのハシリ
・ 巨大な馬釜のあるウチニワ
・ 馬との暮らしを伝える巨大な馬屋
・ 辺り一帯を眺められる外廊下</td><td>土蔵</td><td>・ 2階建、3階建が接続した蔵
・ 屋敷の景観を特徴付ける板壁</td><td rowspan="7">・ 江戸末期までに大規模な盛土工事によって造成
・ 当時の姿をよく留めている</td><td rowspan="7">・ 石垣の上に聳える小城のような稀にみる外観
・ 山谷川流域の農村景観を一望できる視点場</td></tr>
<tr><td>石蔵</td><td>・ 塩竈石を使った石造の蔵
・ 断熱性を重視した屋根</td></tr>
<tr><td>稲荷社</td><td>・ 欅を使い、彫刻が施された良質な社
・ 氏神としては大きな規模</td></tr>
<tr><td>大工小屋</td><td>・ 間仕切りの無い大空間
・ 面によって異なった技術が用いられる土壁</td></tr>
<tr><td colspan="3" rowspan="3">南部曲り家の頂点

典型的な様式の踏襲、規模の大きさ、立地を生かした設計、設計を実現した技術力</td><td>ハセ小屋</td><td>・ ハセ小屋としては大規模
・ 開放的な造り</td></tr>
<tr><td>納屋</td><td>・ 前身建物の部材を再利用
・ 生業の変遷を物語る</td></tr>
</table>

図 1-24　重要文化財千葉家住宅の価値

4　保護の履歴

(1) 指定に至る経緯

千葉家住宅は、昭和 30 年代から南部曲り家の代表的な建物として、専門家の間でその価値が知られていたが、所有者の意向により指定には至らなかった。しかし、老朽化が深刻となり、平成 16 年 3 月 18 日に遠野市が市指定有形文化財に指定し、行政も保護に乗り出すこととなり、平成 17 年には、高橋恒夫氏（東北工業大学）、月舘敏栄氏（八戸工業大学）[10]、大野敏氏（横浜国立大学）による詳細調査を実施、平成 19 年 12 月 4 日に重要文化財に指定された。

(2) 保存事業履歴（重要文化財指定以降）

平成 21 年度	自動火災報知設備設置（国庫補助）
平成 22 年度	屋根等補修（主屋屋根一部差茅、大工小屋屋根鉄板養生、ハセ小屋屋根鉄板養生、納屋庇補修）（市補助）
平成 23 年 3、4 月	東日本大震災（余震も含む）により石垣が一部崩壊
平成 24 年度	石垣災害復旧工事（国庫補助）
平成 25 年度	指定土地建物及び周辺山林を遠野市が公有化（宅地部分は国庫補助）
10 月	ハセ小屋屋根鉄板養生
11 月	敷地内排水路・園路修繕
平成 26 年度	消防道路整備（国庫補助）（平成 27 年度へ繰越）
6 月	主屋屋根差し鉄板養生
8 月	周辺での落雷に伴い自動火災報知設備が故障したため修繕
平成 27 年 6 月 1 日	根本的な保存修理事業着手（国庫補助） 防災施設整備事業（調査工事）着手（国庫補助）（～平成 30 年 3 月）
11 月	主屋一部差し茅
平成 28 年 6 月 20 日	第 1 期保存修理工事着工（国庫補助）（～令和 2 年 3 月）
令和元年 11 月 1 日	防災施設整備事業（実施設計）着手（国庫補助）
11 月 15 日	主屋現状変更許可
令和 2 年 4 月 1 日	第 2 期保存修理工事着工（国庫補助）（～令和 2 年 6 月）

(3) 活用履歴

①　重要文化財指定以前

昭和 46 年	NHK「ふるさとの歌まつり」で全国中継され、それを機に見学者が増え、翌年から無料公開
昭和 49 年	屋根の葺替とともに主屋の大改造が行われ、居住域を除いて有料公開
昭和 57 年	映画『遠野物語』のロケ地となる、その後多くの映画やテレビのロケ地に
昭和 61 年	年間入館者数 65,000 人（過去最多）を記録
平成 3 年	年間入館者数 59,533 人と 6 万人に迫るが、バブル景気の崩壊とともに、その後の入館者数が減少
平成 16 年 3 月 18 日	市指定有形文化財指定
平成 18 年	地元有志の協力により傷みの激しい主屋北側屋根を鉄板で覆い、それ以外の部分に差茅を行う応急工事が実施され、あわせて大工小屋の屋根及びハセ小屋の北側屋根も鉄板で被覆

10　高橋氏、月舘氏は平成 17 年当時の所属

②　重要文化財指定以降

平成 19 年 12 月 4 日	国指定重要文化財指定　引き続き千葉家が居住し有料公開
平成 23 年	東日本大震災により石垣の一部が崩落、震災の影響で、年間入館者数 13,724 人と過去最低を記録
平成 25 年 6 月	遠野市が公有化
7 月～	市直営で（一社）遠野ふるさと公社に受付管理業務を委託して引き続き有料公開。人員体制は、3 名の職員によるシフト制で 2 名が常駐。千葉家が運営していた頃は、敷地内で飲食店を営んでいたが、設備の老朽化などの問題があり、公有化後には飲食店営業は行わなかった。市直営公開時の開館時間及び入場料は以下のとおり。 開館時間：8 時 30 分～ 17 時（入場受付 16 時 30 分まで） 休館日：年末年始 入場料：一般 350 円（300 円）、高校生 250 円（200 円）、小中学生 100 円（90 円）　※カッコ内は団体料金
平成 26 年 7 月 31 日	重文千葉家の活用を考える会設立
9 月 28 日	市民向け見学会
11 月 7 日	学習会「千葉家の魅力と活かし方」会場：主屋座敷
平成 27 年 7 月 4 日	裏山で緑化祭開催
7 月 15 日	学習会「千葉家の眺めの楽しみ方」会場：主屋座敷
7 月 23 日	重文千葉家の活用を考える会活用検討ワークショップ　会場：主屋座敷
11 月 3 日	「千葉家まつり」開催（主催 重文千葉家の活用を考える会） 来場者約 1,000 人
平成 28 年 2 月 29 日	『重要文化財千葉家住宅保存活用基本構想』策定
4 月 1 日	保存修理工事の着工に向けて長期休館に入る
4 月 24 日	修理前の最後の特別公開イベントを開催
6 月 20 日	保存修理工事着工
7 月 13 日	修理工事始動式開催（関係者が一堂に会し修理の成功を祈願）
9 月 1 日	千葉家旧蔵古文書等資料整理開始（継続中）
平成 29 年 4 月 1 日	千葉家旧蔵家財資料整理開始（～令和 2 年 3 月 31 日）
9 月 30 日	修理現場公開（翌日も合わせ 2 日間）
平成 30 年 8 月 5 日	修理現場公開、あわせて「夏のつけもの祭り」（主催 重文千葉家の活用を考える会）開催
8 月 10 日	裏山でひみつきちづくり体験開催（主催 重文千葉家の活用を考える会）
令和元年 8 月 4 日	修理現場公開、あわせて「重文千葉家いしがきまつり 2019」（主催 重文千葉家の活用を考える会）開催
8 月 7 日	裏山でひみつきちづくり体験開催（主催 重文千葉家の活用を考える会）
令和 2 年 9 月 30 日	重要文化財千葉家住宅家財資料調査報告書刊行